

江戸名所図會

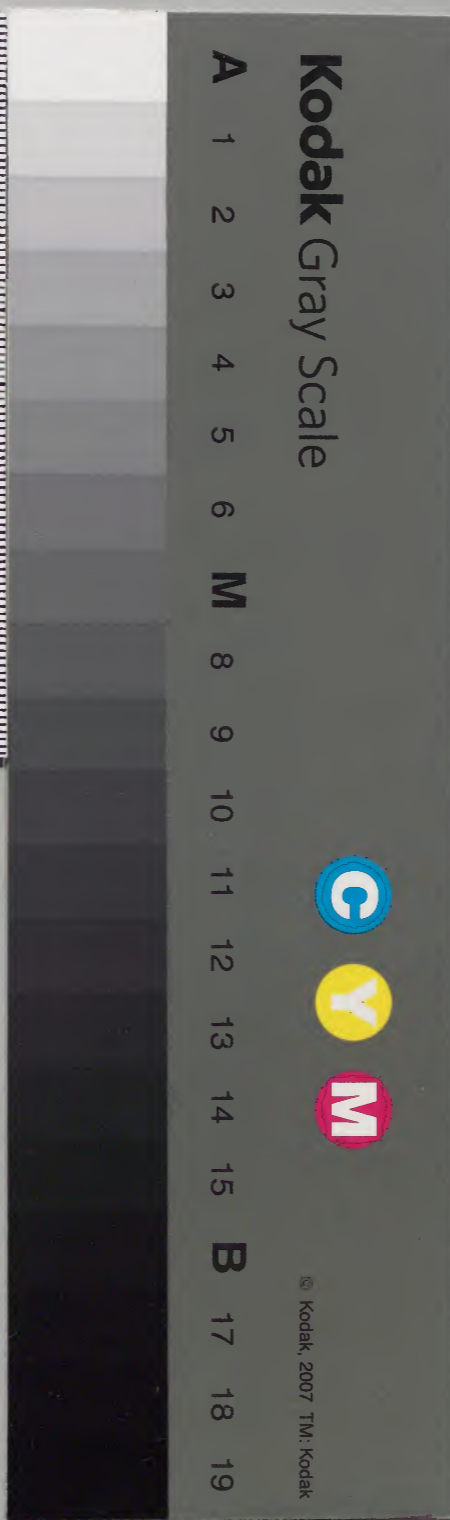
四

農務省
圖書
第 三 冊
共 二 冊

大政官文庫
和書門
一三七八七
二九一〇
函架

内閣文庫
和書類
一三七八七
二九一〇
函架

| | |
|------|----------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 11387 |
| 冊數 | 19 (3) |
| 函號 | 174 31 |

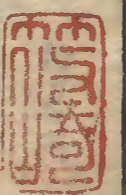
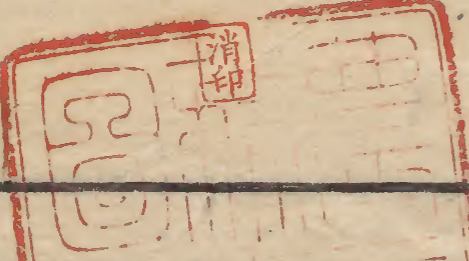


糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

江戸名所圖會卷之二

天旋之部目録

東海寺 同山伏屋和尚の墓
 新敷山 同祭礼の園
 光嚴寺 松法
 貴明神社 二王門
 海龍寺 寄木明神社 魁鳥
 常行三昧寺 本光寺 上人墓
 品川寺 観音
 千林荒神堂
 海曇寺 小徳時宗石塔
 蓮菜山 延命水
 上古海道 明林森
 西光寺
 光福寺 掩系隊
 来福寺 掩系隊
 了海上人産湯井 掩系松
 廉島明神
 磯の清水
 中の指
 品川驛 同治干
 洲邊辨財天
 大龍寺
 妙國寺 六層塔
 般若明神社
 納経塚
 要津橋 千蔵杉
 千蔵杉
 千蔵杉
 千蔵杉



鈴森八幡宮 鳥石 笠島 磯列松 菟箇海

鑑懸松 八景坂 俗やらん坂 行慶寺 蓮華寺 戸越八幡宮

木原山 相模御殿 桃雲寺 蓮華寺 女塚

長榮山 本門寺 觀音堂 妙見堂 女塚

馬込八幡宮 梶原氏宅地 中延八幡宮 美福寺

鴉木村光明寺 功徳水 貴松明神社 蒲田八幡宮

矢口村新田明神社 河邊小田 圓頓寺 蒲田梅林

古川薬師堂 浪古古樹 貴松明神社 蒲田八幡宮

大森 名産海苔 同表葉細工 貴松明神社 蒲田八幡宮

行方 浄心忠明連宅地 圓頓寺 蒲田八幡宮

妙安寺 長照寺 六郷八幡宮

六郷渡 羽田兵才神社 河邊 宗良神社

堀内山王宮 河邊 宗良神社 河邊高室宅地

比上氏所藏蜂籠盆 安中酒徒 末廣松 鹽濱

石観音堂 河邊新田神社 成徳院 浄霊権現社

直新丸渡門尉早膳塚 同居往旧址 姥ヶ森

粟生丸渡門尉忠良塚 宗冬寺 養光寺

佐々木明神社 勝福寺旧址 市場観音堂 鶴見川

末吉不動堂 秋田城介義景旧館址 成徳寺 成徳寺

白旗八幡宮 子安観音堂 松隠寺 慈眼堂

義言入道墓 親福壽寺 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

浦島 同腰掛石 浦島塚 神奈川 譚

宗無寺
雲松院
折本淡島明神社
本覺寺切通
版綱権現社
姥島
惟子里
左神宮
蔭田城跡
青木明神社
神明宮
金澤 同熱島
金沢貞顯墓
普賢象 文殊橋

觀音山
小机城跡
本覺禪寺
袖ヶ浦
本牧十二天宮
惟子川
品野坂 一名権左坂
乘蓮寺
くさくさ妙寺
杉田梅園
徒見堂
美女石
一室

兼好法師閑居舊址
天然寺
野島 土人百軒島
瀬戸
瀬戸明神社
金龍院
上行寺
岩光寺
界地藏
雀ヶ浦 一名天
夏島

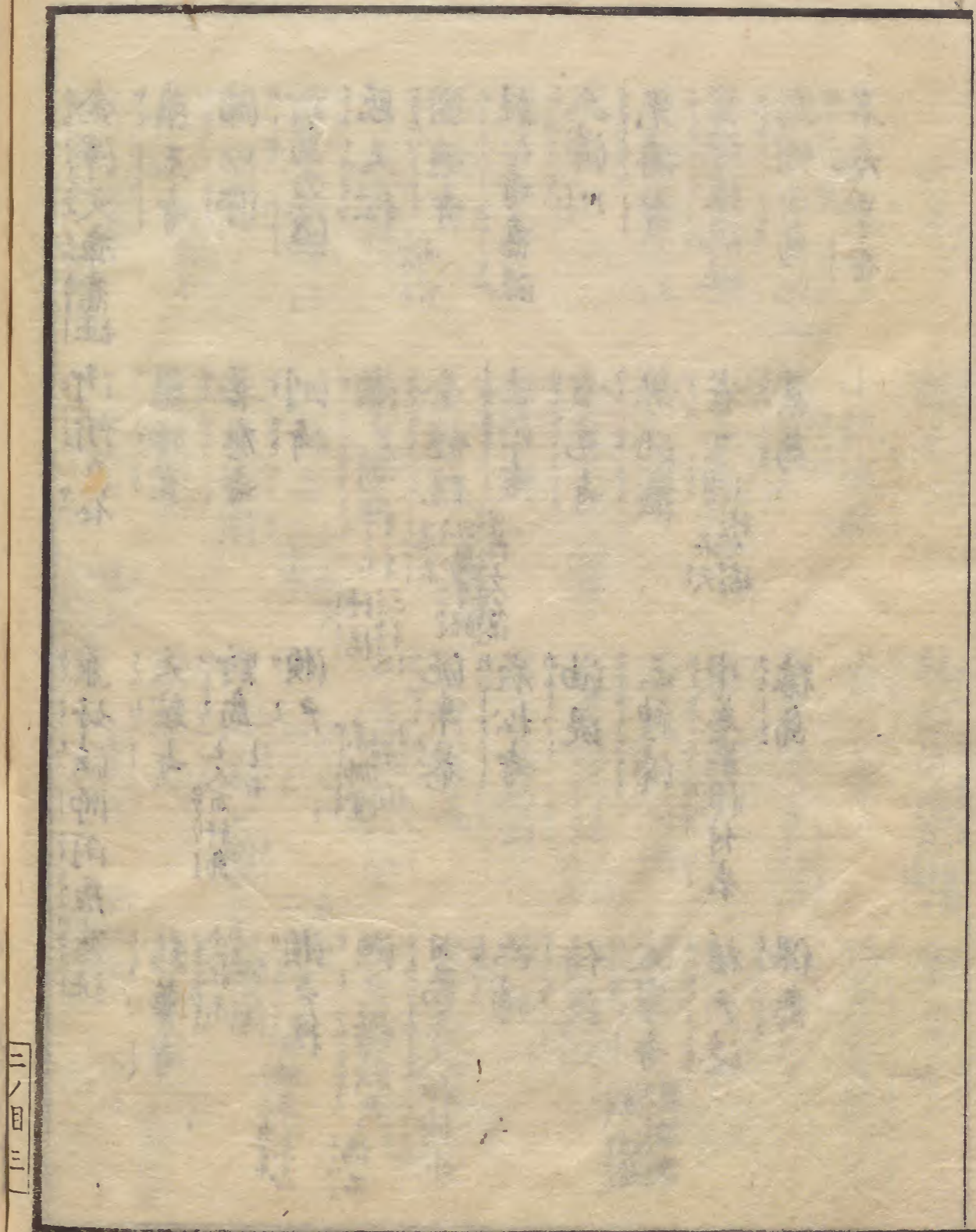
慶雲寺
師忌徳権現宮
西向寺
道灌山
側乾無成天洞
杉山神社
津戸川
界本
任吉明神社
稱名寺
西木
徳権現宮
寺堂
二ノ目二

金澤文庫舊址
薬王寺
浦の郷
野島の渡
照天松
圓通寺
徳仁寺舊跡
六浦川
光傳寺
菅根権現社
鳥帽子島
名産甲番

瀬戸新ヶ谷
薬師堂
善應寺
洲崎
瀬戸明神社
金龍院
上行寺
岩光寺
界地藏
雀ヶ浦 一名天
夏島

徳権現山
泉谷寺
多目周防宅地
陽光院
富士湯間洞
吾妻神社
程ヶ谷新町
古町街道
二位禪尼彩堂
同海氣と製子圖
擲筆松
二王門
西木
徳権現宮
寺堂
二ノ目二

新華寺
瀬戸橋
瀬戸辨財天
日為上人加持水
六浦
侍従川
太寧寺
榎戸湊
保島



三ノ目三一

萬松山東海禪寺 呂川北馬場ありて花浴大徳寺派の禪宗

江戸觸頭の一員より當寺ハ輪番中より年々八月より交代を

寛永十五年戊寅 台命を奉じて澤庵和尚開創を爲

所の禪園なるを塔頭十七

佛殿 釋尊の像を安んず額 祈禱堂 天倫筆 二重家根額

世尊寺殿 同筆 山門樓上は観音を安んず額 潮音閣 大明院宮

公辨法親王真跡 中門額 東海禪寺 天倫筆

鐘樓 本堂の右よりありて 要津橋 南の方よりあり 千歳杉 同所橋あり

門へは道の右よりあり寛永の頃 大樹命 千歳杉と云と見え 浴鳳池

十境の一室 厨の項 暴風吹折るとして今ハ其幹 川より残れり

下方の庭の泉水より十境の一なり 寺後 釣玄室 池の北の汀あり 大樹寛永

山下清泉流出師引之洞一池於室之北面云 則十境の一なり 東海和尚年賦云寛永二十年仲秋の頃 澤庵和尚と

此所より 西海同ありとある 則十境の一なり 東海和尚年賦云寛永二十年仲秋の頃 澤庵和尚と

台駕入東海 既月於山亭 台顔怡而出 山亭猶 兼月明 倚池上 小亭亦 倚傍云云

泰龍井 樹せむその水清冷甘美なり 是も十境の一なり 萬年石 池中央の

一なり 寛永二十年癸未三月十四日 大樹當寺へ台駕を移させり



午頭天王社
東海禪寺

其二

法寶堂

方丈
加書院茂院內馬南都梵木能其餘人物花野の類なり
あり切經を収蔵し池より北よ
あり當寺十境の其一なり
杉戸壁上の画ハ狩の探幽の筆なり

萬年石記 茲寬永癸未三月十四日 偶
左相府之見移 奇形 惟台座 於此池
石之無或由 醒之 李狀 不端 險
翁之骨乎 或於 免之 額 石 挺
裡之痴兀 恬淡 虛容 是世 有求 奇者 未
貴也 似得 恬靜 焉也 趣 而 未
名各以所守 思聞 焉也 相 君 命 侍 所 思 非 此 體 不 如 之 在 防 粟 風 幽
酌相半也 時小 焉 於 此 諸 子 雖 有 茶 爐 下 矣 無 所 懼 可 至 無 虛 所
旨下 一 即 起 向 疑 是 萬 年 政 一 侍 三 點 頭 言 矣 君 懼 有 斟
君况於 石 曰 不 疑 是 萬 年 政 一 侍 三 點 頭 言 矣 君 懼 有 斟
下發 而 限 於 石 曰 不 疑 是 萬 年 政 一 侍 三 點 頭 言 矣 君 懼 有 斟
且而 凡 數 變 呼 疑 是 萬 年 政 一 侍 三 點 頭 言 矣 君 懼 有 斟
千始 則 窮 者 始 改 呼 疑 是 萬 年 政 一 侍 三 點 頭 言 矣 君 懼 有 斟
千此 無 窮 者 始 改 呼 疑 是 萬 年 政 一 侍 三 點 頭 言 矣 君 懼 有 斟
則累 華 頂 窮 者 始 改 呼 疑 是 萬 年 政 一 侍 三 點 頭 言 矣 君 懼 有 斟
其幾 萬 世 矣 可 輕 以 文 銘 氣 住 山 老 衲 澤 庵 宗 彭 敬 書
以鈞 命 如 驚 豈 可 輕 以 文 銘 氣 住 山 老 衲 澤 庵 宗 彭 敬 書
春命 幾 萬 世 矣 可 輕 以 文 銘 氣 住 山 老 衲 澤 庵 宗 彭 敬 書





二ノ三

弟命身月月号受疾如寺復之入寺幕黑号河大問卓鈞然飢下生
子也於十不而道預下其舊鞏山曰下不無 上法庵命師色扁涯
武門東一痊煩俗知點可規固草東於日國 皇嬰曰召知寬投爾
野人海日一 予緣墨知之識木海金而師皇召睽檢還其永淵後
氏在之也日 賻盡書也 新生落城下号情入遇東二行己軒歸
安泉西世曉朝衆遺于正 筑輝成南謚也大 優暫翁止已折山
齋南北壽天奏僧誠贊保鈞之師之品天願悅 渥寓師係師脚陰
翁者岡七授莫著去詞乙命久奉日川應下師仙對止抵數有鐺之
往祥唯十筆入衣瘞於酉益昌 賦創大 奏院望焉武不事內故
年雲種有書木喫全其夏是辛 賀草現綸我講愈 陵寔昇煮里
昇樹松三邊牌飯身上令依已鈞頌梵國旨山原高 於容玉麻構
師塔乎僧一於如於以畫師歲命致刹師 第人戊幕城色室麥一
行名其臘字本乎後為師之降賦釐使有 二論寅下外壬翁粟把
實曰上五泊寺日山壽劃所使和祝師功上世辨秋徵民申同豆茆
求寂不十然之矣莫空一願本歌厥住于皇徹瀾師師村 照給於
銘然樹有而祖且誦同圓也寺一後持曩允翁激之於一 于日宗
其曩塔九逝堂莫經年相有出首 山祖之唯起京營牛幕窮食鏡
塔背益瘞實云為設仲相功世祈 曰若圭有如師中鳴下卿而主
因參依于十云求齋冬中于制國台萬此章禪懸 時之降遐無山
循學遺全二彌謚莫示親本法基與松也寶師江 時地 微有之

勝深塵邑在寅禪峰延驪緯寺本歿于師襲彭界難命師驪亟之之
繁靖埃之雲再室視師喜有經寺也陽入寶禪而寫畫有也見弗典
抱有視南門造問其為如古二板師春室護子能平匠所鏡之就籍
烟時聲再巷大道去開見人年着昔聞師同麼殺素寫契按機明附
霞寓色建乙仙詰留山點風而繼衆師之色 予佛作鏡悟同辨堂師
沈南若南卯之且知祖佛味入臨陽勘酬有失着略壽授邑縱古初
痼京泡宗南拾馳其也同七院德春辨對宗笑快入像印南橫鏡雲
有之幻不宗雲書輕師邑何于禪補而敏無云拂魔索證宗應禪英
時芳有亟罹軒謝重齏有告本同席驚捷者何子界贊語寺答師偉
僑林時不鬱師之陽法宗退寺年慶異而為不突而鏡号師如一公
城菴在徐攸禪癸明語印還大秋長嘉玉先問出還涉日執響凍玉
州鞞泉尋之坐丑殿慶者于德八丁謨轉考起云降毫澤侍實滴甫
薪光南復災之一下之創泉一月未云珠齋大父魔書菴中透公琮
之匿天舊師暇新信讚建南香主師真回緇平攘宗曰賦瓶網住公
妙耀下觀告緇南尹之一泉為龍年跨也侶天羊活鹿祇日金色以
勝有邑師邑大宗公于菴南古興三竈此殊下隱機面夜夜鱗之法
寺時而視宰燈之一泉名緇鏡山十兒時請師之自易抒參而陽器
守入寔名相年鐘夕南曰素供南有也鏡圓領底由描其究頓春期
空泊幽利攸譜樓入于祥郊住宗五於臥鑑之不入中義鏡響菴師
寂瀨遂若於叔甲師龍雲迎山禪遷鏡病國珍是佛眉師知青師招

未果亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 於亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 虛亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 經亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 師亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 道亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 一亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 擘亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 矩亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 播亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 四亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 其亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 十亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 室亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 海亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 規亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 中亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 湧亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 笑亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 為亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 真亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 眼亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 覲亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 古亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 大亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 流亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 入亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 鏡亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 燈亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 大亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 日亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 燕亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 陋亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 講亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 習亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 道亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 義亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 於亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 乃亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 師亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 者亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 莫亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 若亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 余亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也
 也亦故不之燕陋講習道義於乃師者莫若余也

無名一子告予曰邈得日和尚之真展見則一圓相也
 野重錄九點十即書曰邈得日和尚之真展見則一圓相也
 海坐其此圓相包作九箇人蛙軒泥沙南泉曾劃圓相
 家似豆此圓相包作九箇人蛙軒泥沙南泉曾劃圓相
 麥籬彼此圓相包作九箇人蛙軒泥沙南泉曾劃圓相
 修十方薩全列麟鳳此似粟外窮塵無瑕類相漫歸秦
 些王法身全列麟鳳此似粟外窮塵無瑕類相漫歸秦
 彌勤不募前體顯諸阿迦難我羅漢物是霞門邊六世藝
 杜多却增聲聞課湯菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 呼衣蒲童子聲課湯菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 節茶下童子聲課湯菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 添我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 爹我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 生我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 萬我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 所我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 前我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 將我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 正我氣請看閣侍我菓不世王難我羅漢物是霞門邊六世藝
 保來絕等無已野猶氣下蒲却不法方邑豆此中錄九點十即書曰邈得日和尚之真展見則一圓相也
 第空裡差嫌治藥底病若相任落違順邪境家經祖傳錄方語點檢
 乙花中若者落違順邪境家經祖傳錄方語點檢
 酉閏五德見東海比立某老齡七十三
 前住大德見東海比立某老齡七十三
 影と拜
 天下
 東海比立某老齡七十三

海
 影と拜
 天下
 東海比立某老齡七十三

少林院
林泉
縣居大人
墓
南郭先生
墓



縣居大人墓
塔中少林院の後山より當院過去帳に玄珠院真淵義龍居士
とあり明和六年己丑十月晦日歳七十三にて身終るなり
卷ノ下

南郭先生之墓
同柳塔よりあり一家の墳墓並び建り先生姓ハ服部氏諱ハ
元壽字子遷俗稱小右衛門南郭ハ其号なり其先尾州津

島七黨の一やと曾祖父某越中國高島は徳父の諱と元矩との京師に移る
母ハ山本氏なり天和三年癸亥生る歳十四江戸より来り祖孫先世業と受後三年

柳澤侯は仕入後十八年致仕し宝曆九年己卯夏六月廿一日卒し壽七十七とあり
墓碑の銘文ハ「小畧を其碑陰に後四位下侍後源頼順撰臣高元碩謹書」とあり

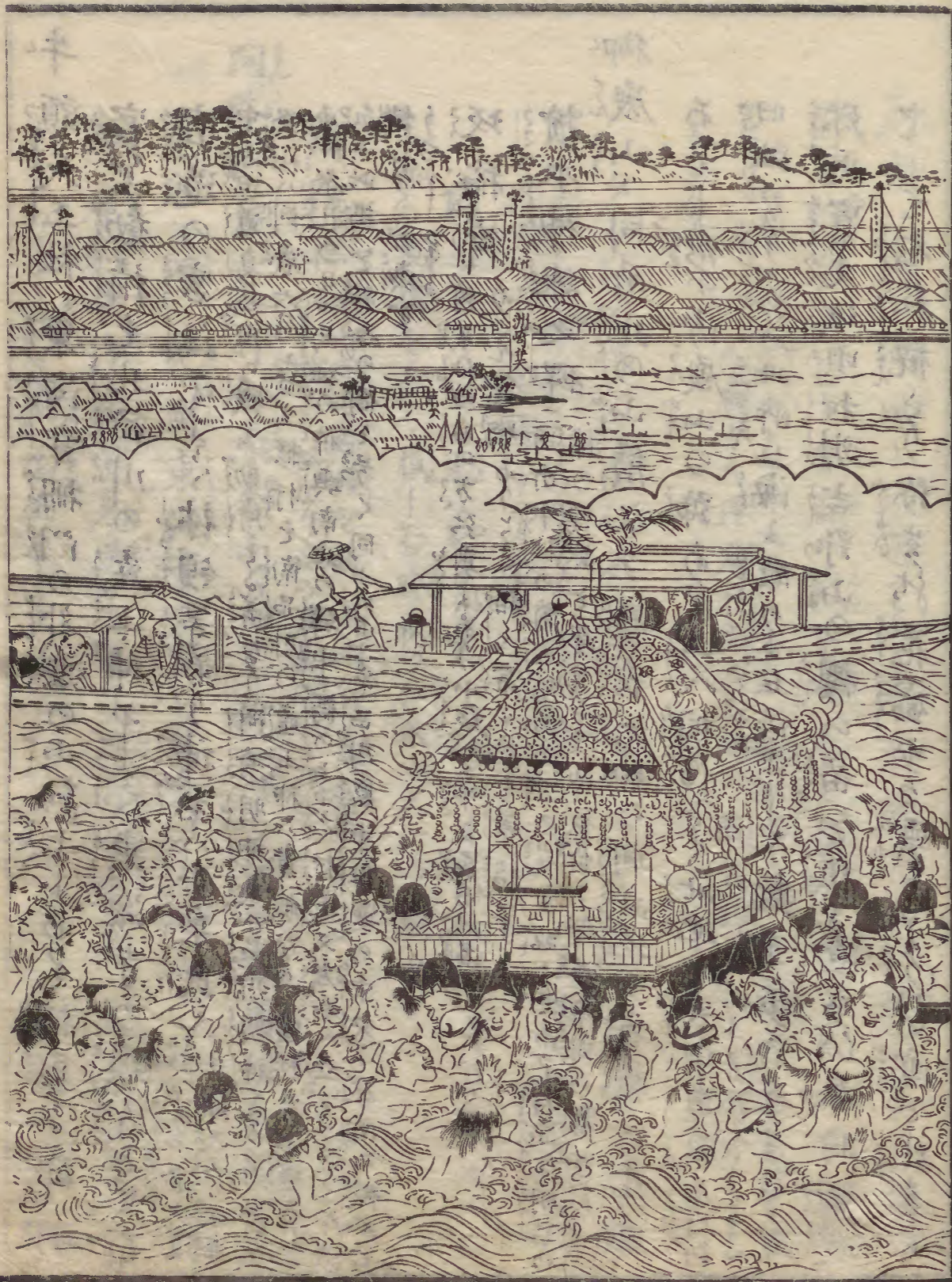
鎌倉權五郎景政靈祠
同所春雨庵の後の山あり津由知ハ此庵ハ
土岐家累世の祖廟なり岡山澤庵和尚寛永六年

己巳より同九年壬申に至る迄羽州上の山に謫せられ
項の草蘆春雨庵と移されりなり

此寺ハ品川の勝區中々門前の緑水を漲後とく品川乃
流海口は通を屋後青山崔嵬とく祇植の祠松間は聳ゆ

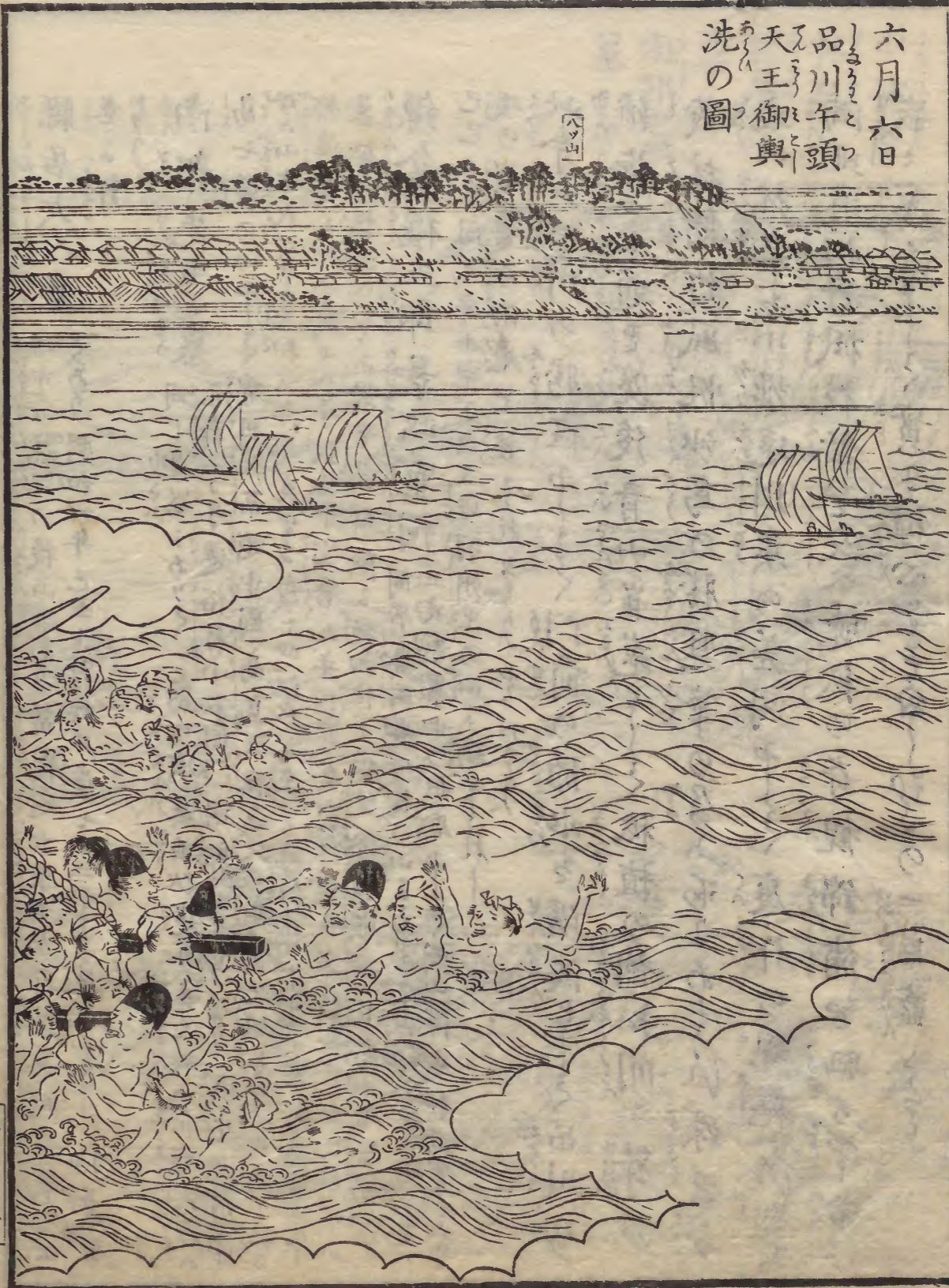
茂林脩竹風帆沙鳥の勝覧筆の乃ふ而もあはれ殊更方
文の林泉を小堀遠州侯の差図中々庭作の規範とて都て

滿地青松丹楓枝葉と交へ晩秋の奇觀錦繡と晒りや常に
寂々寥々として實は禪心とて一巨藍とて



六月六日
品川午頭
天王御輿
洗の圖

八ツ山



牛頭天王社 東海寺柵門の外左の山に上りあり相殿に神明

宮を勧請せ北品川の産土神なり東海寺の鎮守とせり

官造の宮社なり社領等あり神主ハ小泉氏也

中太田道真品川の城に勸請せ所なり洲崎明神或ハ品川明神ともいふあり

祭礼ハ例歳六月七日は修行を南品川の産土神ハ貴船なり當社ハ由緒あるあり

此橋を於合の橋と号く同十九日また品川驛中往還の中央ハ旅所の假家と

備けく神輿と

坂指荷 同社の右の方には奥あり小坂を降りてあり此名

抄本神詠之碑 同所神社の前石階の上左の崖に臨みてあり石面ハ明石の

御殿山 同所北の山積なり慶長元和の間此地ハ省耕の所殿

ありし船小所殿山の跡あり土人相傳へく此地を太田道真居住の

旧趾なりとの此所ハ海に臨り丘山ありて數千歩の芝生あり

殊更寛文の頃和州吉野山の櫻の苗を植ふせり春時爛熳

やしく尤莊觀より弥生花盛むる雲とよりハ雪と乱きて

花香ハ遠く浦風ハ吹送る磯菜摘海人の袂を襲ふ樽の

前ハ酔を進むる春風ハ枝を鳴さる鶯の轉るも大平を奏

さる小似たり 寛永十七年九月十六日大樹此地ハ所遊獵せられり頃

夕ぐれと情をまむ木の間にをまきのの海歌月 澤庵

月の花の清杯はうつりたるは一首と 上意あり前の日雨の降り

其日ハ止る空曠さるりありしハ

享保の頃檻を多く植ふは晩秋の紅葉又一奇觀なり

鑄鐘松 増上寺の鐘を鑄る地あり其跡の

問答河岸 又舟船雁木ともいへる新宿の東の海岸なる相傳ふ

寛永の頃 大樹東海寺へ至らせり頃所塚あり時

澤庵和尚所後を見送るなり此所迄来り 所問答あり

一とわく故に此唱ありしハ



御殿山
看花



磯の清水



磯の清水

浄殿山の麓清水横町と云ふあり往古ハ此辺まで

磯辺

なり〜〜此井清泉〜〜早魁も涸る事なり

品川驛

江府の喉口〜〜東海道五十三驛の首なり日本橋

品川驛

あり二里南北と分つ東海寺の南に傍る貴船の社の側を流る川を堺と

旅舎

数百軒端と連ね常々賑々往來の旅客絡繹と

絶

〜〜絶

梅花

無盡藏曰品川注云隔五十町有江戸城多

法華

宗云蓮紅二層兼一層

同書

曰長亨丁未小春二十又二日扣品河之岐軒

之途

城壁也瀆而見六七小舟二又二日扣品河之岐軒

潮氣

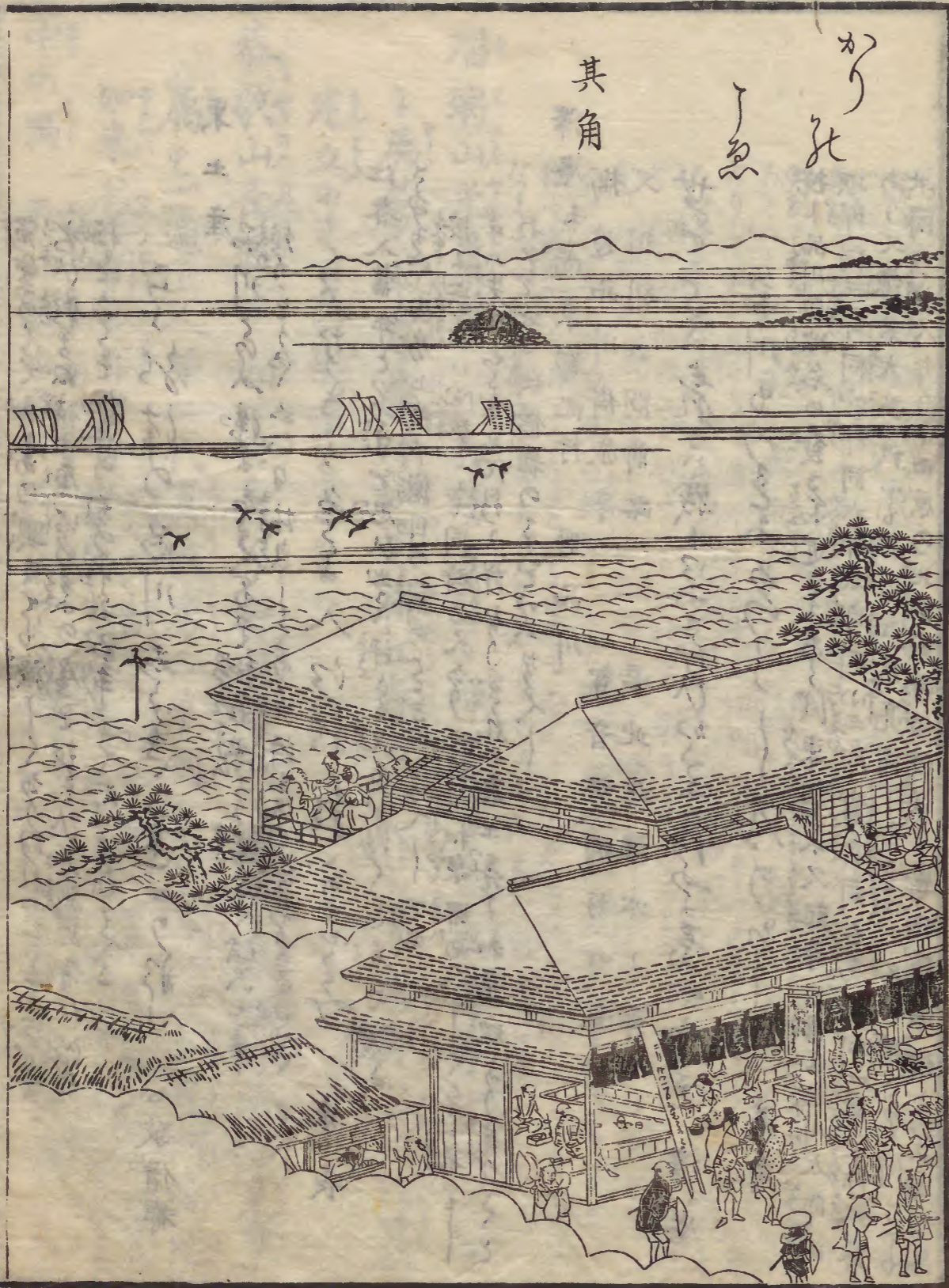
吞瀆萬頃連殃及舟楫嘆无地不紛然詩

重城

日勤塗壁馬触蛭無地不紛然詩

心敬僧都記

〜〜心敬僧都記



旅亭のそと... 心敬僧都

東土産

品川... 宗長

江春入舊年... 宗長

澤庵和尚京都記行 過品川

橋過品川 倚旅亭 吾此生涯酒好叮嚀

又相別去問前路 澤庵

品川もつとふり... 其角

按品川の地名の發... 澤庵

川南北より其頭も二つ分... 瑠璃山光巖寺 北馬場ありと禪宗中々東海寺中清徳寺

恭敬山長徳寺 四丁目より時宗中々相州藤澤の清浄光寺... 品川驛舎の中間あり

永平三年五月
 後奈良院御撰
 謎合もふ
 海のそと
 十里ふ
 多しん
 蛤



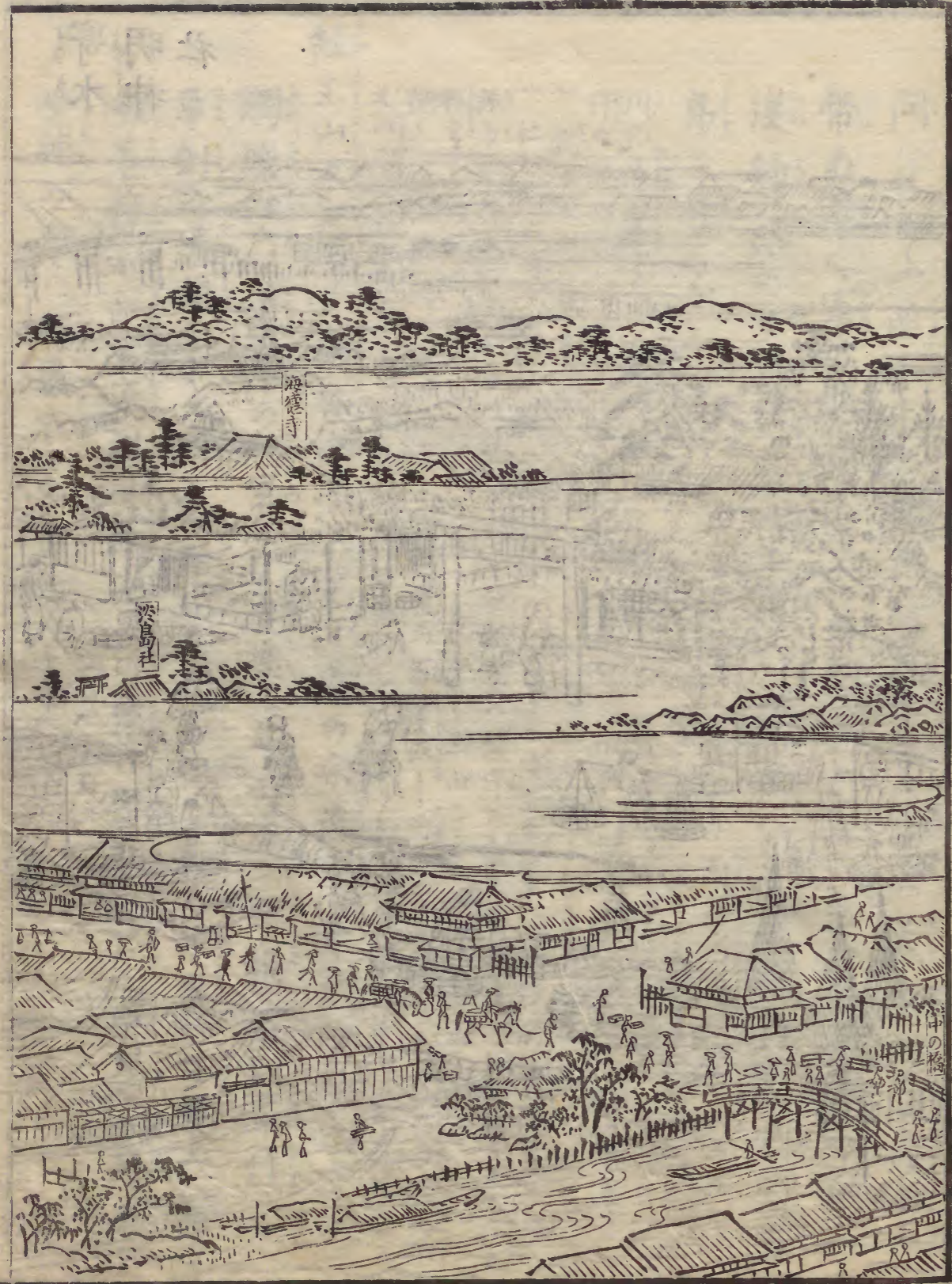
品川
 汐干



洲崎弁天



東流するもの則品川を毎歳六月七日祭の時ハ南北牛頭
 天王此神輿此橋上より行達する依り又里俗行達の橋も唱へり
 貴船明神社 驛舎南北品川の境中の橋の南岸海道より右より
 れを相殿の神明と牛頭天王を合祭を南品川の産土神なるを
 毎歳六月七日ハ天王の祭礼なり其前神輿を海中より昇入り
 後驛中の假屋を假げかゝる神幸なり貴布祢の祭
 例ハ九月九日神明ハ同月の十五日なり 神主鈴木氏奉祀也
 寄木明神社 南品川の洲崎より相傳ふ神代の昔弟橘媛
 日本武尊と共に王船に乗し此海上を渡りし頃覆りたり
 その船材所々の浦に漂流し此地に流れしより一ハ土人
 一社に奉りて弟橘媛の靈を祭りて寄木明神と号する又寄
 作の後船魂西宮大神を合殿とて往古源義家朝臣奥州
 征伐の爲東國發向の時此地に馬を止め漁人より當社の来由を



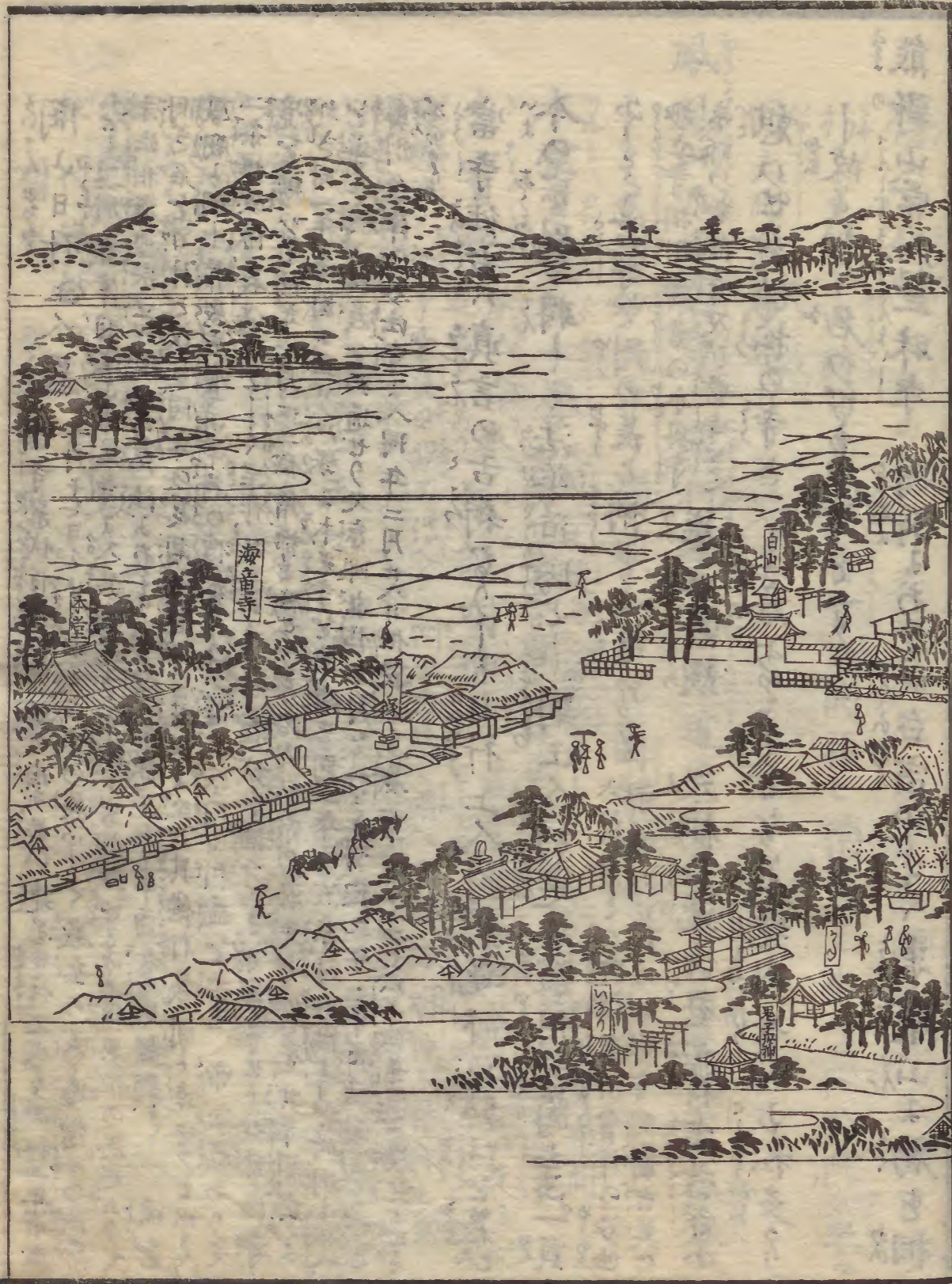
寄木明神社



向いせあふ漁人先の神傳を答へまじりてハ義家朝臣自親奉幣ありて軍の勝利ありん事を祈りて奥羽の逆乱平治の後歸路の日再び當社に詣てられ兜を取らぬ故に此地を兜島と号するを

往古ハ今の伊殿山の麓より南北宿の辺ハ一面の洲ありて漁家の多し其項此流神を以て後世洲の間川の流れを今ハ又橋邊の山衣の流を以て一社と一社併の兜の紐を神籙と云ふ又橋邊の山衣の流を以て一説ハ山の林ありて細く海中へ垂る洲崎の形似て共はさるる一社ハ洲の崎ありて洲の崎と号けり後至るハ洲の明神と唱へ又稱方明神といひ誤る此社ハ今引く妙國寺の鎮守と云ふ也當社の外に寄木の社と稱するもの此洲崎の地ハ往古より往還の船を改し所なく遠見の番所を居置北条又山内上杉の家々の制札数箇の條目を注せり今も此地何某の家は傳へり

經 王山本光寺 南番場はあま日蓮の宗流なりて京師妙満寺派の觸頭江戸三箇寺の一室より永徳二年壬戌二位権僧都日什上人草創の佛刹なりて則上人を以て開山祖と稱せ中興ハ日鏡上人あり本尊釋迦如来宗祖日蓮大士の像ハ作者詳ならず又境内鬼子母神の像ハ日蓮大士の作なりといへり



本光寺
大龍寺
天龍寺
海龍寺



開山日什上人墓

當寺累代住持の如塔の内、並に建日什上人を祀り、三年甲寅二月十七日、其徳十方、備玄妙法印、の思惟の志趣ありて、味法相應の宗立、蓮師の弘法、を著し、永徳元年辛酉、舊宗と稱し、鳳淵朝一、昇殿を鷹司中侍の傳奏中、の謹て宗門の利益を奏せ、帝夜感ありて、二条攝政源義満公とて、室津延長の帝行、精誠を抽き、命せし、其年開東は、境と賜つて、同年七月、正二位僧都に任ぜし、浴内弘宗の執免と改め、其年開東は、起き、同二年、為國に到り、此塚に本光寺と草建せ、同三年、癸亥、京師妙満寺を開創し、衆を導き、大弘法義を弘通せり、又京師在位年月を往く、明徳三年壬申、再比開東は、奥州會津の妙法寺に入、同年二月廿八日、化寂あり、歳七十九と云、以上法華靈場記より

當寺往古ハ真言の古刹なり

日什上人の時蓮師の弘法を慕ひ、今の宗風は轉一と法華道場と一、則上人創建の體用六箇寺此一貞、ゆゑ當寺を用の長と稱せざる是かる、六箇寺とは、所謂奥州會津の妙法、妙立寺、相州鎌倉の本興寺、慶安の頃、大樹此地法遊獵の頃、當寺ハ、憇つせむひ松の寺と、上意あると云なり、境内昔ハ古松多あり、故よかく名つたひひと云なり

熊野山常行三昧寺

同所はあを天台宗中々東叡山は屬を相

傳入 仁明天皇の嘉祥元年

戊辰慈覺大師常行三昧を修、行し、あひ白跡中々、則當寺の開祖と稱せると本を阿弥陀如来、同大師が彫造なりといへり

鳳凰山天妙國寺

常行寺の南海道の右にあつて日蓮大士の弘法ハ、

本堂日蓮大士像

天目上人授与の靈佛中々、五層塔、建立せと云

多寶塔

造営せとあり、詠訪明神祠、當寺の護法神なり、此祠ハ先日記

崎明神

と稱せとあり、後世誤り傳へく、洲の山林と唱へ、又詠訪明神祠、小幡稱を竟り

十八丁四方あり

と云と、二王門、左右は、靈剛殿、殿跡の二王の像と置、運慶の作

山玉宮の二王

あり、山玉宮、後東叡山へ、總門、東海道名所記に云、妙國寺

駿河大納言殿

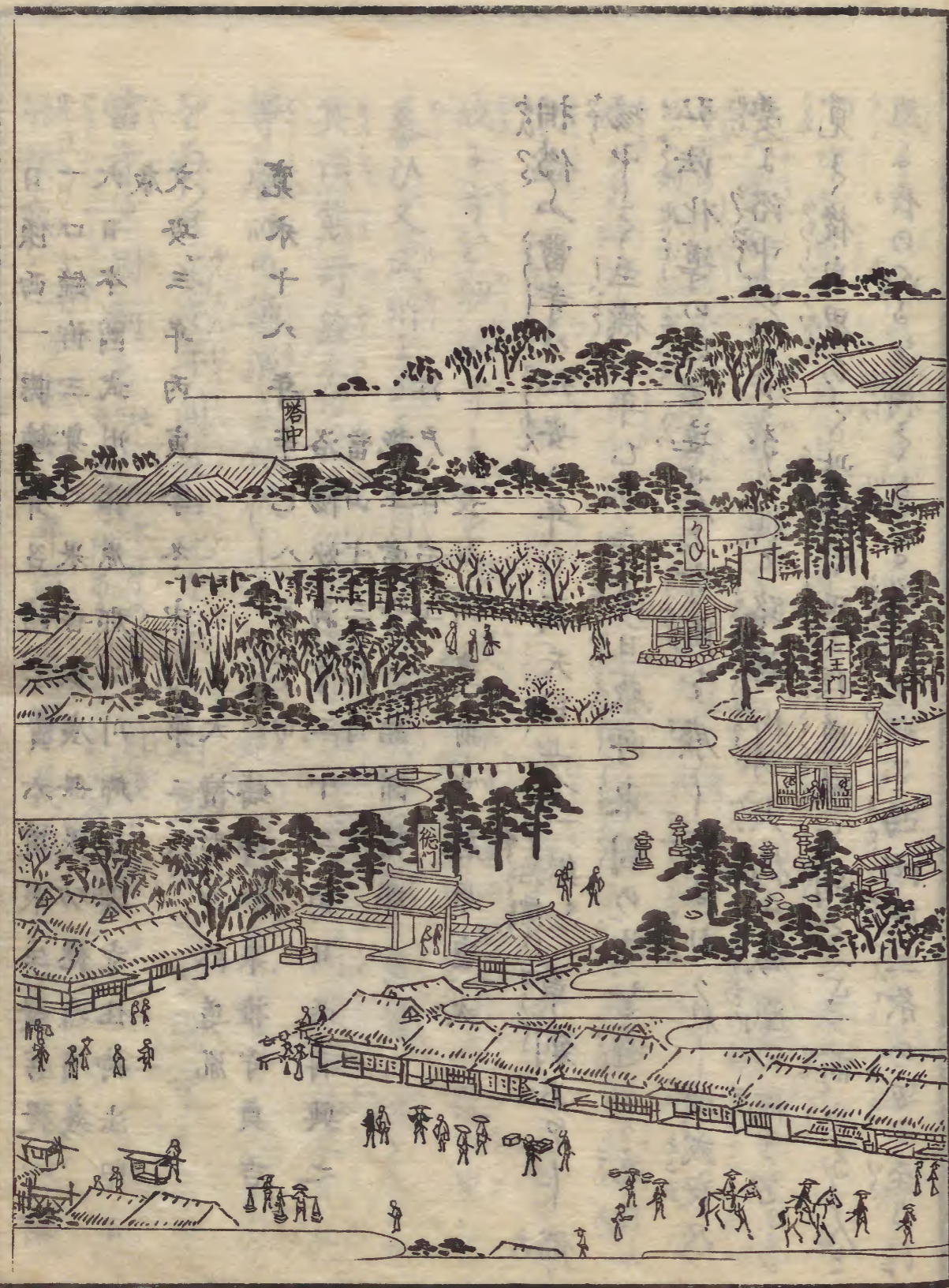
の屋敷の御成門を引、建り、

鯨鐘

文安中鑄治せしものなり、寛永十八年、鑄改し、と云、日蓮の

往代鐘銘

曰、聖衆之影向、宛如華散、風結縁之得脱、亦似



日傾西一聽鐘聲召請三寶六道衆生發菩提心鑄
一口鐘祈三身之果善根廣無限功德遍有幾
大日本國武州荏原郡品川郷妙國寺住持法印日
文安三年丙寅季冬中旬第三天
檀那沙弥道胤
鑄師和泉權守貞吉

寛永十八年辛巳八月下旬
洛陽妙滿寺三代目十三祖日延再興之
鑄師和泉權守貞吉

江
施主當寺一結諸檀那
住右工長谷川豊前守藤原重次

相傳ふ當寺ハ弘安八年乙酉天目上人中老僧の草創あり佛
場中々至徳二年乙丑寺主日叡師東國の乱を避んく為且々
弘法化導の志を達せんと寺院を廢し京よ赴くれ頃或夜乃
夢よ浴中りくとみられと路傍柳の大樹ハ鳳凰の栖ると
覺く後自思らく此瑞や正よ我道場を開くべき前兆ありんと
直よ夜の夢を待く急き洛中を廻り西洞院三条の辺小至るに

果しく大樹の柳の茂るあり則夢此應なりと其地を開き
一字を當り鳳凰山青柳寺と号し日蓮大士よ天目上人へ附屬
の大曼荼羅を安置し廣く妙經の法を弘む其旧跡ハ花洛西洞院
名井の中柳の水と嘉慶元年丁卯天下疫疾流行を後小松帝
詔あり師を此災を除くむ依奇験の料とて康應元年南北四丁
東西二丁此地を賜り然といへとも其寺院ハ徳の大乱ハ廢せし
故に寺を妙滿寺と撰む彼大曼陀羅并蓮師親筆の其後旧里を
慕ひ又武州に至ると天目上人の靈蹟を興起し舊貫を復さんと
其頃熊野鈴木の後孫沙弥道印鐘銘道胤品川領主鈴木光純
等叡師の誦演を信伏し七堂建立の財をなす叡師小力と
をありせ文安年間彼旧地を象し則鳳凰山妙國寺と号け
當寺を開創し此地安永亨の年号前後せり永亨六年既妙國寺へ
先立り九十有餘永享六年前の將軍義教公の執り上杉憲泰
執不審とせ

先境の由緒を奉此地の四至を定めらるる其外数通の判形の
書ありて其後天正十八年當國所打入の時
大神君當寺に入らせし止宿ありしゆりて後寺領を
賜ふべく朱章を添らる江戸寺社領を附しあり又寛永十一年伊奈
半左衛門を奉初とて諸堂を營建かたしゆりて院主日延を
し中興開山たごき旨命せしれ此時より紫衣を免さる以て
永規とす

上杉憲泰

宛り武州荏原郡南品川之端芝原地より

右依佛地より不堂永代八郎三郎之所補任也仍四至境
東南ハ大道塚西ハ田塚北荒居道ヲ陽堀塚
以之竹本可調植者也仍宛状也件

永亨六年甲丑五月十三日

憲泰判在

妙國寺別當沙坊

同 寄進武州荏原郡南品川妙國寺地より

右彼地此間七字不分明南着四波堀塚西着大々道塚北着
塔中塚彼内畠同勢阿弥作畠一段并四帝之寄進地
より寺家之内在之此外常金可作畠一段同東着海塚
南着觀音堂垣塚西着大々道塚北着大堀塚為金澤
智光院勿沙菩提并為南小路雲光沙菩提永代彼寺
令寄進處之然間至子之孫之於此寄進不者不可有異後
仍寄附之状也件

永亨十年戊午七月十八日

憲泰判在

足利持氏將軍

武藏國荏原郡南品川妙國寺より附預之状也件

亨德二年五月八日

後四位下判在

當寺別當

判札妙國寺

右此為寺為手軍勢甲乙人等監妨狼籍之輩
停止より若至于違犯軍者之處罪科状也件

大永四年正月十二日

氏綱判在



品川寺

本堂

天橋

方丈

海照山品川寺

其跡氏康氏昭等の證狀あり前上総介定景中務少輔持助開善左衛門
三寶院に屬す同所南隣る普門院と号す真言宗中々京師
海照山品川寺 同所南隣る普門院と号す真言宗中々京師

三寶院に屬す同所南隣る普門院と号す真言宗中々京師

本堂 本尊聖觀世音菩薩 海中より出現あり一圓浮檀金の靈像

世は水月觀音と稱へる此靈像の利益感応のまゝなり

藥師堂 持の像と安置を弘法大師作なり十二神 紫銅地藏尊

建立する所や江戶六地蔵の一貫あり

本尊縁起云く往古弘法大師東國遊化の頃此地の押領使品川

氏何某 此人なり 附屬せし同左京亮迄其家より傳へる信

せり 左京亮の名は後倉 遙の後應永に至る鎌倉の公方足利左兵衛

權督持氏と上杉禪秀合戦及び一頃品川の一族悉く討死す

其時中々深く草堂の内は秘り置しとて後太田左金吾道灌

品川の地を領せし頃深く此本尊を崇信し一字を建立し

大圓寺と号し夫より後又後倉管領上杉の両家不和ゆ

關東大亂る依り諸の寺社破滅せしり必か江永祿九年

小田原の北条氏政今川家へ加勢あり信玄と戦ふ時信玄武

藏の北の方より不意に押寄せ江戸地ひ品川を追補し民

家を焼拂ふ此時甲州方の中より竹森蔭村といへる二人の侍品

川觀音の御堂を焼く本尊を奪ひ甲州へ歸る其者大

狂亂し本尊元の地へ遷せし旨威靈の示ありと武藏ハ

敵地なるハ其便をゆそ一人の乞食の聖を頼り元の地へ還

座なり草堂といふも御堂も焼亡しこれハ其礎石の跡を

地を求め形をかりの草堂を造り安置なり

遙る年月隔り後兼應元年壬辰法印弘尊堂宇と建立

し名を海照山品川寺普門院と号し今來日降普門示現の

千躰荒神堂



威力著く惠日の光煩惱の闇霧と破る感應の水月ハ長夜と照しぬ

按は妙國寺什室は存する所の永享十一年上杉憲泰寺境寄附の證文ハ南ハ觀音堂坂と畧とせとありて則當寺の觀音のありと云々

千體荒神堂 同所半町をわたり南同海道の右の方海雲寺にて
 禪林ありて本尊荒神の靈像ハ毘首羯磨天の真作にて
 昔九州肥後國天草荒神の原といふありて邪宗門一揆の
 項邪徒等社と破却せ故ありて當寺は勸請せしめて靈驗
 ありて衆人常々系指す毎月廿八日を以て録日とて祭礼ハ

三月十一月共廿八日なり

補陀山海晏寺 同所一町をわたり南海道の右にあり曹洞派の
 禪宗ありて三田の功運寺は屬を北條相模守平時頼朝臣の
 開基とて大覺禪師と開山と稱し古山和尚と弟二世の
 天叟慶存和尚慶長元年丙辰當寺と再興し中興也



海晏寺

題海晏寺紅樹
 古刹楓林簇晚霞
 深深庭院駐年華
 那知秋後風霜色
 却勝江南二月花
 春臺



海晏寺
 紅葉見之圖



なる慶和尚八松平因幡守康元の子なり天正御入國の頃三州
 改らるる當寺を賜ふ曰く臨濟宗なりと此時より今の如く洞家

本堂本尊鮫頭觀世音

鐘樓 本堂の前の左の方より元禄十五年當寺回録の災火罹り舊鐘
 焼損を依り宝永七年改鑄し往古の銘と其終り刻せり

南膳部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川郷
 補陀山海晏禪寺爰十方施主屢捨祥財聚銅金專
 命良工鑄成佛器高掛層樓美哉堂々大器落落洪
 音斯迺見色明心聞声悟道之因是故鳴鐘相念偈
 願此鐘声超法界錢困幽暗悲皆聞問塵清淨證圓
 通一切衆生成正覺是以虎溪老拙厥銘曰
 鳴氏炉鞴四海九根 當陽掛起 法音千鈞
 色透碧落 響徹利塵 鶯破睡夢 忽性真
 弘濟群類 普結良臣 法輪常轉 佛日尚新
 寶德三辛未仲夏下泮 法輪常轉 佛日尚新
 且越道琳現住 存紹代 鑄師 定吉
 寶永七中夏上旬

雲版一口

高八寸二分
横八寸三分

蓮花大弁
二寸四分



背



元永二〇〇〇記五五五〇〇〇

北條相模守時頼朝臣石塔 本堂の前方の碑面最明寺殿
 廿二日正五位下行相模守平元帥時頼と彫付てあり

二階堂出羽守石塔 本堂の後の山腹あり往古より當寺の門前鎌倉
 北条家迄ハ執權の中入關門の守護と森の屋敷を建てる官人と
 置れし故に此出羽守も其頃品川の守護と此地にありしなり

當寺の香花院 按よ二階堂出羽守三人とあり一ハ左衛門尉正五位下出羽守行義八道道空

此号也文永五年閏正月二十五日歳六十六中... 卒八同後五位上出家... 行藤正安三年八月出家... 道曉と号し... 元八年八月二十七日卒... 七三八同從五位下出家... 羽守入道道... 吉野城攻の大将... 以上三階堂出羽守... 三人あり... 何れも是なり... 然るも... 忽門の額... 海晏寺と書せし... 寺僧相傳へ... 二階堂出羽守行氏の筆... 守は住し... 弘長三年十二月出家... 法名道智と号し... 文永八年六月七日五十... 一歳ふ... 卒

梶原平三景時石塔 同所小並入景時謀叛を企て... 治二年庚申正月廿日... 甲子人等と一戦し... 竟に影時討死せり... 東鑑より... 是れなり... 北条左京権大夫平時宗石塔 同所... 北條左京権大夫平時宗石塔... 宝光寺慶道果大禪定門と号し... 三月廿日所勞四月四日出家法名道采同日酉時死す云

楓樹江戸丹楓の名勝ゆく一奇観... 晩秋の頃ハ満庭錦... 浦と晒とくめく海越の山々ハ紅の葉分小見え... 蒼海夕日小... 映し... 又紅を濯り... 書院僧房も其色よか... 此地遊賞... の人酔色な... 江戶砂子... 龍腹紅葉... 千貫松... 燈松とも号らる

千貫牡丹 佛殿の前... 又ハ欄影向の牡丹とも号らる... 千貫松 燈松とも号らる... 龍 庭前の池... 兩溪橋 御手洗池... 蓬萊山 御手洗池... 總門額 二階堂出羽守 行氏筆

梶原屋敷 梶原家の石地藏の作... 権現御手洗池 延命水... 明神森 山王社 八幡宮... 寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地ハ海... 中より敷一口漁夫の網よか... 揚れを腹中より正觀音の... 靈像を得... 此ハ鎌倉へ聞え... 八時頼朝臣希代... 是祥瑞なる... 寺邊ハ佛閣を闢くと觀音の... 淨土なれ... 補陀山と号し... 四海安平の義よより... 海晏... 寺とせ... 瑞林瑞應廣正東悦等の四院をも造営あり... 同... 六年の春諸堂落成... 翌年七年入佛供養を修行を... 敷の

寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地ハ海... 中より敷一口漁夫の網よか... 揚れを腹中より正觀音の... 靈像を得... 此ハ鎌倉へ聞え... 八時頼朝臣希代... 是祥瑞なる... 寺邊ハ佛閣を闢くと觀音の... 淨土なれ... 補陀山と号し... 四海安平の義よより... 海晏... 寺とせ... 瑞林瑞應廣正東悦等の四院をも造営あり... 同... 六年の春諸堂落成... 翌年七年入佛供養を修行を... 敷の

地と鯨濱とつひ又鯨頭嶺とつひ海の方百八十間余又時頼朝臣南北十二町東西十町の地を寄捨あり五箇の僧坊百八十貫文を附せらる八十宇の房舎ハ巍然とて覺をなしたる又天竺の靈鷲山ハ南紀の高野山ニ擬しあひくハ有信の輩ハ月牌を置石塔を建弘安五年ハ北条時宗願主とて堂塔重修せられ月牌料とて二十貫文寄附ありとたり殊更重罪の輩たりとも當寺ハ入者ハ其罪を免許せしめ則を定め山庫僧供ハ四方十里の間頭陀の免許ありとたり往古當寺開創の頃松樹各二千株を植洲崎ハ八幡三社を營ミ建其松の枝葉多路を覆ひて繁茂せし其頃獅童の唄ハ品川浦ハ名所なり海晏寺前のまろと松樹代もさうえくめとてあよと祝ひとなり鄙言奉る不堪と

鯨頭明神祠 砂水の海濱あり祭神詳ならず土俗傳云往古

此地ハ文餘の鯨の揚るありし其頃此地大ハ疫疾流行せりハ此鯨の祟なりと恐怖して漁人其頭を一社の神と祀ると終り按此祭神と鯨の頭とをさるる所恐らくハ海晏寺本尊の縁起ニ混し附會せしむる一或人云く砂水昔ハ鯨洲ニ作りたると終りハ鯨洲の明神と作て

住なるん或冊子云く此所ハ佐美津川とて細き流の瀬と交らそと佐美津

上古海道 品川より池上へ行道大井より北の方東海寺南門

向の谷往古の品川の驛路なる也土人今も元其道筋大井荒瀧池上

矢口とほつきし所と今もハ景級あり西南池上へ行道ハ昔の一里塚の横一株

式大井驛傳馬の證とせし延喜式曰

諸國驛傳馬 中略 武蔵國驛馬 店屋 小高

海賞山來福寺 砂水御林町あり真言宗中々本尊小地藏

菩薩を安置せ弘法大師の作御文九分なり梶原氏の草創ゆ

則此地ハ其宅地なりとあり縁起云此本尊ハ梶原氏代其家小

相傳く尤靈威なり然元亨の頃智辨と云沙門眼疾を患ひ

此本尊に祈念し不日よ本快を得り其後世の中大ハ乱る小

本尊の所在本尊ありしハ文龜年間梅巖阿闍梨當寺より四五町

西の方徑塚とつり地やこれと感得せとなり徑塚の由来ハ次ニ詳かり

雪中菴
夢太

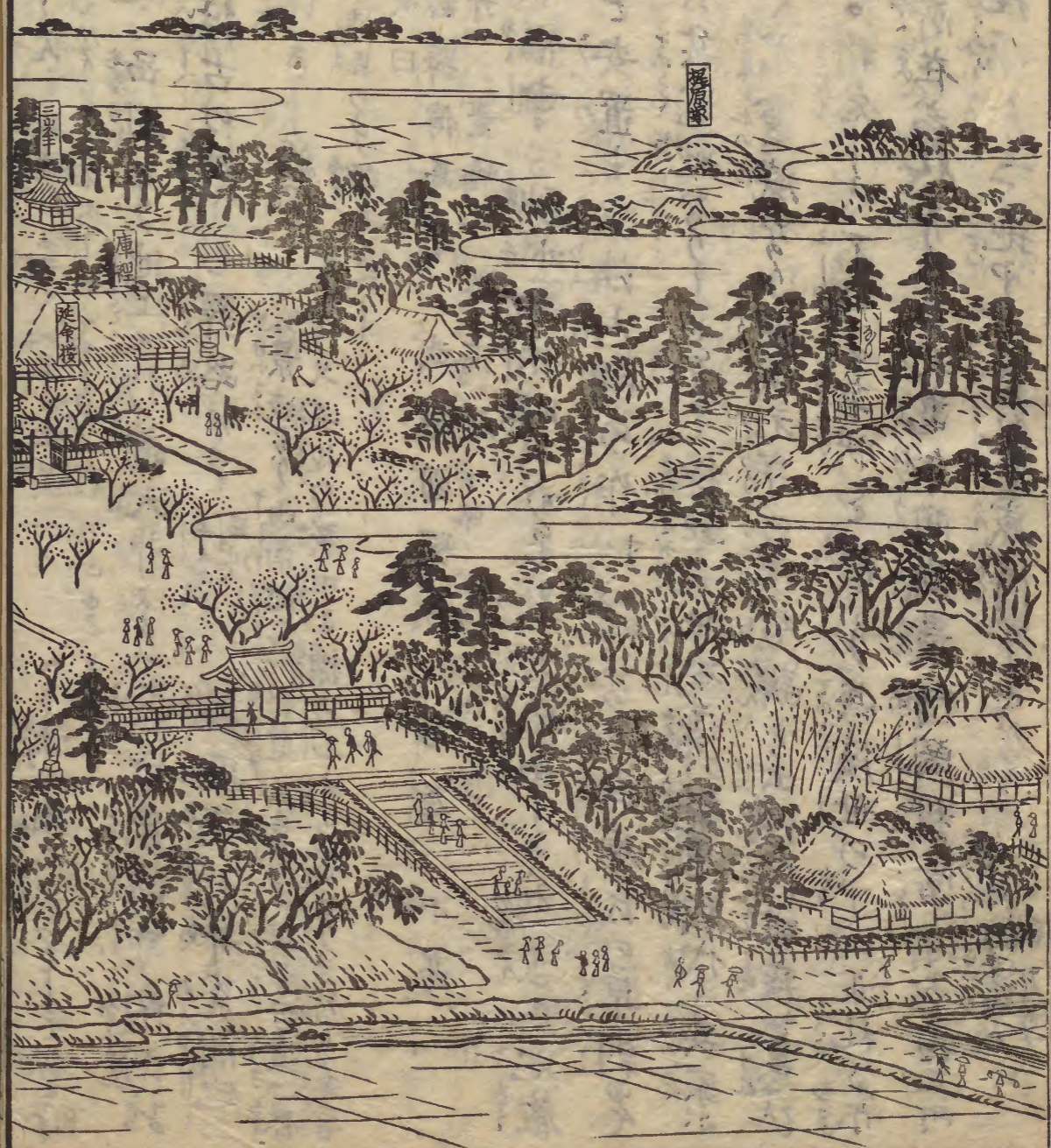
そ
ろ



来福寺

世の
中

ろ
ろ





西光寺

此寺は當寺開基梶原氏と稱するもの、小田原北条家の幕下たり、梶原
日向守なるべし、永祿二年の頃六郷内新井宿の地を領せり、北条家所領
後、梶原氏を以て是より考ふ、此所は日向守の采邑の地中と又其宅も
此所あり、と思はれ、土民古傳、其宅の跡、來福寺あり、ハ、砂水
松平土佐侯の別荘の地なりともいひ

延命 櫻 本堂の左の方 梶原松 同所あり 梶原氏 梶原塚 寺の後
あり、塚上は杉を植へ、此は農氏の構の中、梶原塚と号するものあり、其
其氏族の墓所なり、其餘一族の石塔當寺あり

當寺 境内 櫻樹 數株 あり、悉く 品を 領てり 弥生の 花盛

納經塚 來福寺より六町を西にあり 相傳ふ 往古 右大将

賴朝 卿佛經を 書寫 あり、此地は 収り、と、り 來福寺本

尊地 藏菩薩 此所より 出現し、あり、頃 土中 中、夜なり

讀經 一、あり、と、故に 來福寺 尊と 稱せり

松榮山 西光寺 同所二町を南にあり 弘安九年の開創あり

と、り、と 往古 八天台 宗中、榮順 律師 開山 あり、其後

弘福寺



大井おおい



親鸞上人弘法の道場と當寺十五世を空善と号し若賀入道
 禪可より十四世若賀伯耆守後五位上清原真人元則の長子小
 して俗稱ハ武藏五郎西光又幼名を伯王丸と号し今當寺を西
 光寺と号す此西光の名を摘み号けたる寺寶に
 武田信玄の陣羽織と称するものを収む庭前醍醐櫻と名
 する老樹あり花ハ單瓣中々立春より七十日目の頃より開
 ちむ其餘却々への櫻の老樹数株あり満花の節ハ奇觀
 あり此地第一花の名所なり

大井山弘福寺 西光寺より一丁をかり西南あり當寺も鸞師の
 弘法中々中々阿彌陀如来の像ハ聖德太子の作なりや
 此地ハ麻布山善福寺の中奥了海上人誕生の旧跡あり
 弟三卷麻布善福寺の下の詳なり 當寺の櫻の老樹あり春時奇觀なり
 了海上人產生湯井 寺の後園あり此の岳の下に横穴の泉あり
 横へ入り深くさうとあり又當寺ハ大井と

鹿島大明神社 同所一丁とあり 西南あり 社記云く 當社ハ安和二年
己巳九月十九日 常陸國鹿島の御神を遷し奉ると云く 別當を不現
山常林寺と号し 天台宗なり 東叡山に屬せり 本尊ハ藥師如来
慈覺大師作 開基ハ尊栄法印なり 貞和三年丁亥再興す 了覺
阿闍梨と中興と稱せり 境内櫻多く 春時一奇觀たり

本地堂 智燈大師の作ありとあり
古鵜口 別當常林寺に取む 松女敬白とある上の文字よむるに 按よ
奉寄進 武州荏原郡大井郷鹿島宮鵜口
寛正二年癸未十一月日 掃松女敬白

鈴森八幡宮 同南の方繩を隔て十町あり 不入斗村あり
祭神 中殿 應神天皇 左殿 仲哀天皇 總社 盤井
神社とも稱せり 別當ハ真言宗なり 八幡山密嚴院と号し
神主ハ森田氏なり

武蔵國風土記 殘編云 圭田三十六束二字
武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六束二字
田敏達天皇二年癸巳八月 所祭大己貴命也 社
邊有磐井祈事 土俗有妄願 則御手洗井水變之
味事正直 則如清水 近國奇之 祈病者取之 服之
其功驗如神 土俗曰藥水云云

三 貞觀元年冬十月七日己丑 幾内幾外諸國遣使
斑幣於天神地祇 去九月祈無風雨之災 誠有感
於歲以有年仍賽之 武蔵國從五位下 磐井神列

鈴石 當社あり 相傳ハ他の石をとりて 擊ハ其石 鈴の音ありと 當社
傳記云 此靈石あり 此地の名を鈴石 森と云ハ 後中畧して せりのとあり 或ハ
云ク 昔の石ハ 賊の爲に 集りたりと云
鳥石 社の形を 顯ハせり 石の左の角に 南朝先皇の 銘あり 鳥石 葛辰 是を 鑄
舊麻布の古川町より 三田の方へ 移すの 三辻あり 一と 後此地へ 遷すとあり 書きた
古篆なり

武蔵國風土記 殘編云 圭田三十六束二字
武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六束二字
田敏達天皇二年癸巳八月 所祭大己貴命也 社
邊有磐井祈事 土俗有妄願 則御手洗井水變之
味事正直 則如清水 近國奇之 祈病者取之 服之
其功驗如神 土俗曰藥水云云

三 貞觀元年冬十月七日己丑 幾内幾外諸國遣使
斑幣於天神地祇 去九月祈無風雨之災 誠有感
於歲以有年仍賽之 武蔵國從五位下 磐井神列

鈴石 當社あり 相傳ハ他の石をとりて 擊ハ其石 鈴の音ありと 當社
傳記云 此靈石あり 此地の名を鈴石 森と云ハ 後中畧して せりのとあり 或ハ
云ク 昔の石ハ 賊の爲に 集りたりと云
鳥石 社の形を 顯ハせり 石の左の角に 南朝先皇の 銘あり 鳥石 葛辰 是を 鑄
舊麻布の古川町より 三田の方へ 移すの 三辻あり 一と 後此地へ 遷すとあり 書きた
古篆なり

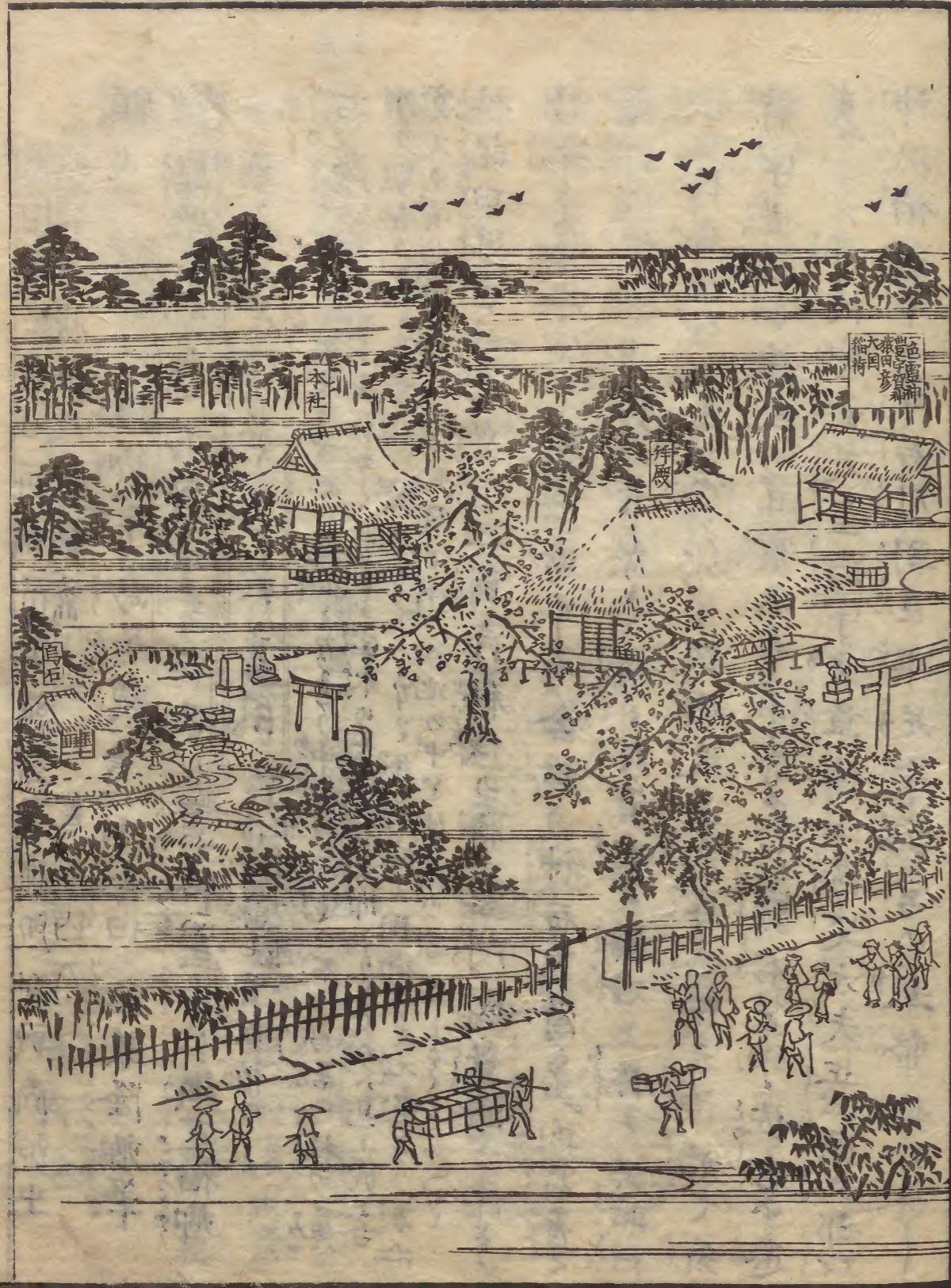
武蔵國風土記 殘編云 圭田三十六束二字
武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六束二字
田敏達天皇二年癸巳八月 所祭大己貴命也 社
邊有磐井祈事 土俗有妄願 則御手洗井水變之
味事正直 則如清水 近國奇之 祈病者取之 服之
其功驗如神 土俗曰藥水云云

三 貞觀元年冬十月七日己丑 幾内幾外諸國遣使
斑幣於天神地祇 去九月祈無風雨之災 誠有感
於歲以有年仍賽之 武蔵國從五位下 磐井神列

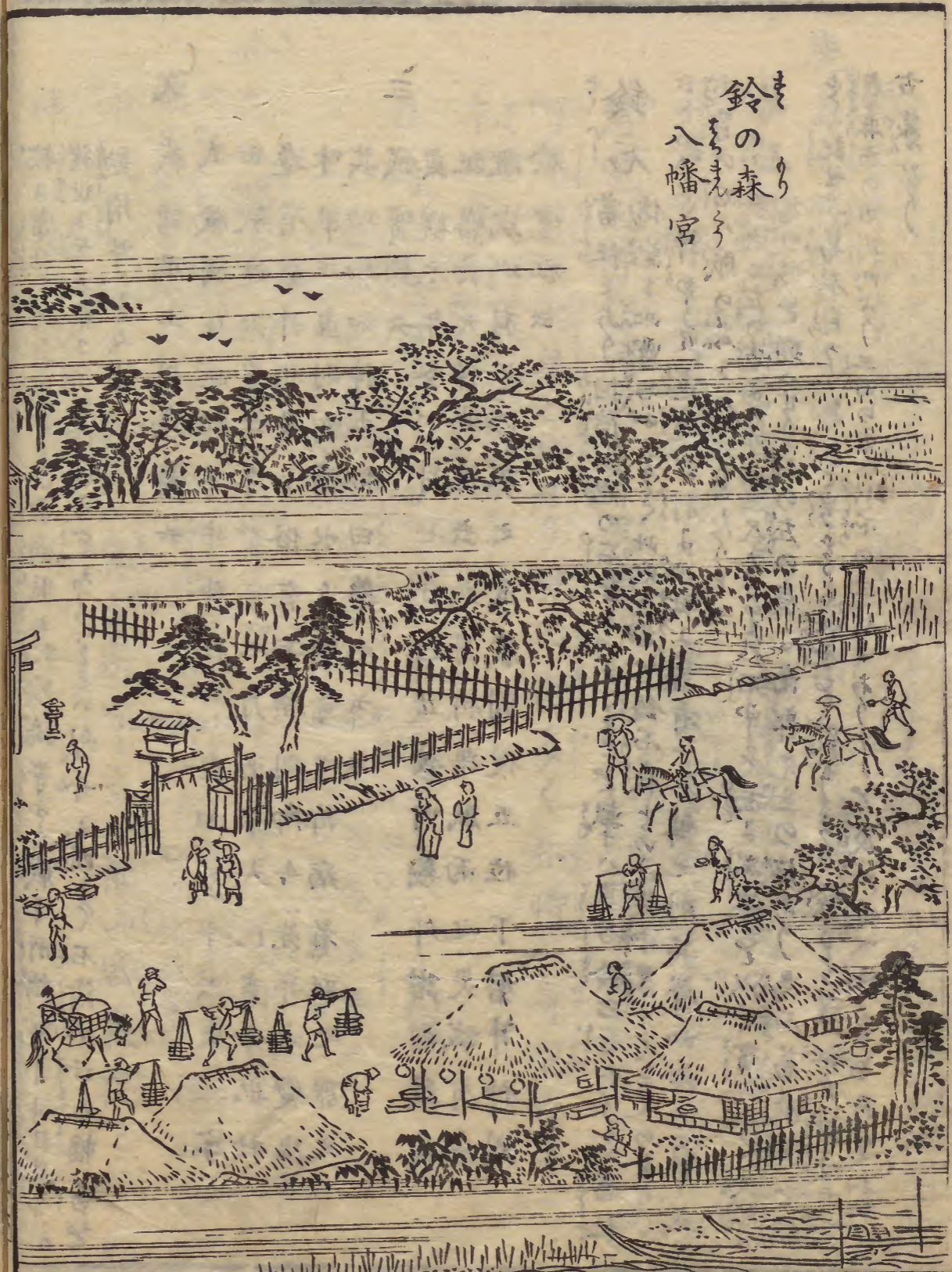
鈴石 當社あり 相傳ハ他の石をとりて 擊ハ其石 鈴の音ありと 當社
傳記云 此靈石あり 此地の名を鈴石 森と云ハ 後中畧して せりのとあり 或ハ
云ク 昔の石ハ 賊の爲に 集りたりと云
鳥石 社の形を 顯ハせり 石の左の角に 南朝先皇の 銘あり 鳥石 葛辰 是を 鑄
舊麻布の古川町より 三田の方へ 移すの 三辻あり 一と 後此地へ 遷すとあり 書きた
古篆なり

武蔵國風土記 殘編云 圭田三十六束二字
武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六束二字
田敏達天皇二年癸巳八月 所祭大己貴命也 社
邊有磐井祈事 土俗有妄願 則御手洗井水變之
味事正直 則如清水 近國奇之 祈病者取之 服之
其功驗如神 土俗曰藥水云云

三 貞觀元年冬十月七日己丑 幾内幾外諸國遣使
斑幣於天神地祇 去九月祈無風雨之災 誠有感
於歲以有年仍賽之 武蔵國從五位下 磐井神列



鈴
の
八
幡
宮



匪星昏石而條不黃維昏魯隸所到死而祠出

額 鳥石 阿野公祖卿筆 鳥居額 鳥石祠 吉田二位兼隆卿筆

聯 龍珠の珠並島雨 梅小路三位參議定福卿

偈降蒼海於森風

中一首 中一首 中一首

石華表 六七町東の方今海面とかり中音の頃迄ハ石の鳥居の柱の礎

社記曰往古神功皇后三韓涉征伐の時長門國豊浦の津より

前宇佐宮は鎮座の日靈示あるふより此寶石を宇佐宮に遷

其後聖武天皇御宇文章博士沙史大夫正二位文部

神祇伯勲十二等石川朝臣年足宇佐宮の奉幣使たり

時ハ幡大神再ハ靈告あり依之此靈石を年足の家に移

崇信ハ嫡孫中宮大夫後四位中納言豊入卿桓武天皇の

延曆年中武藏守に任せしむ當國ハ下向ハ荏原郡に在せ

頃終ハ此地を封ハ當社を徑營ハ神石を鎮座ナシ

當社は是レ故ハ宮地を鈴石森と云其後清和天皇御宇貞觀

年間ハ幡宮宇佐宮より山城國石清水ハ鎮座在とき六十

餘州國毎ハ總社ハ幡宮を擇定賜ハ依ク武藏國ハ於テハ

當社を以テ總社トモトイフ

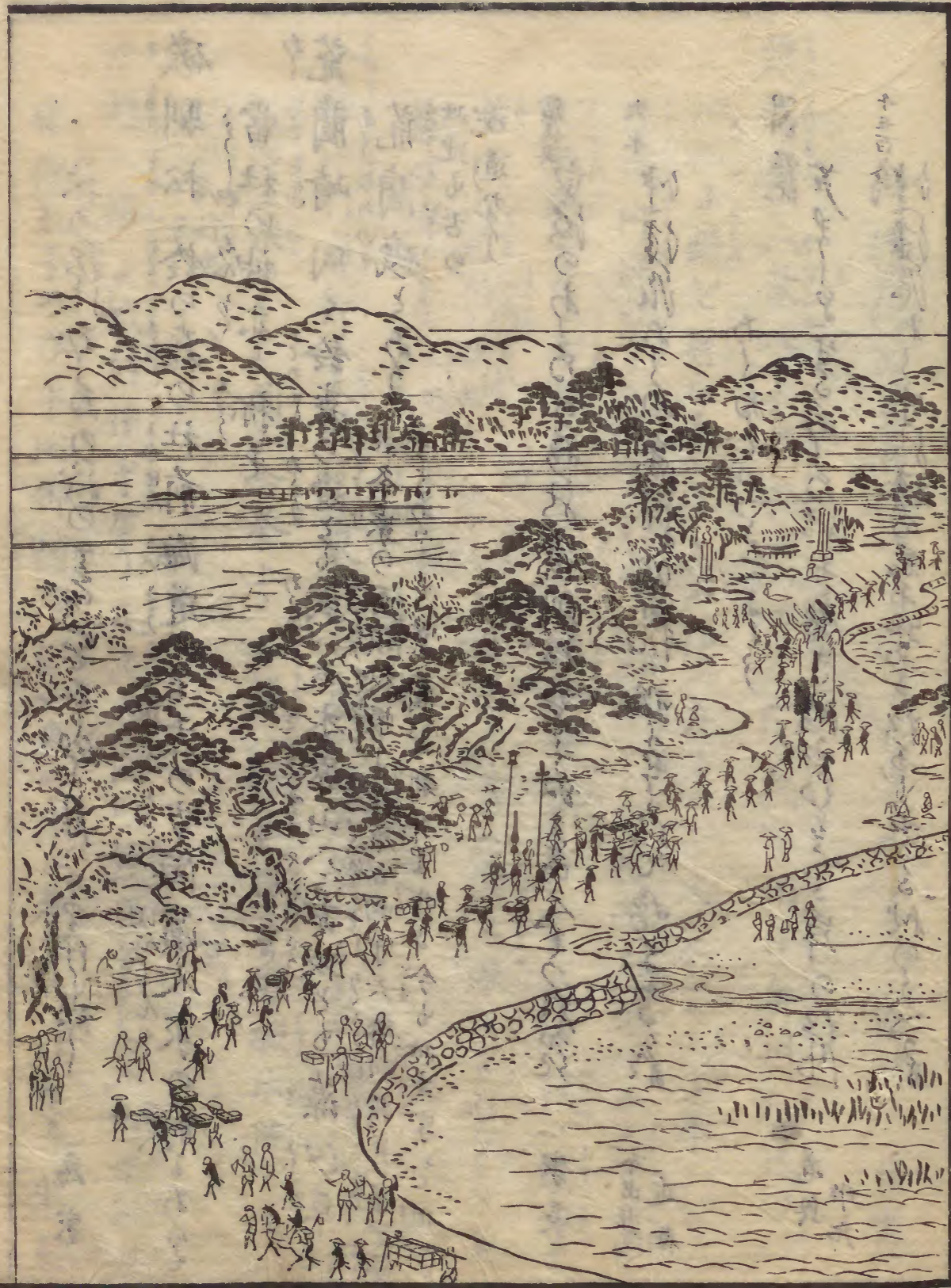
笠島 鈴森の地をとりて八幡宮の境内左の方ハ笠島神社ト

稱スるものあれども定あり祭ハ神六前豊宇賀姫猿田彦

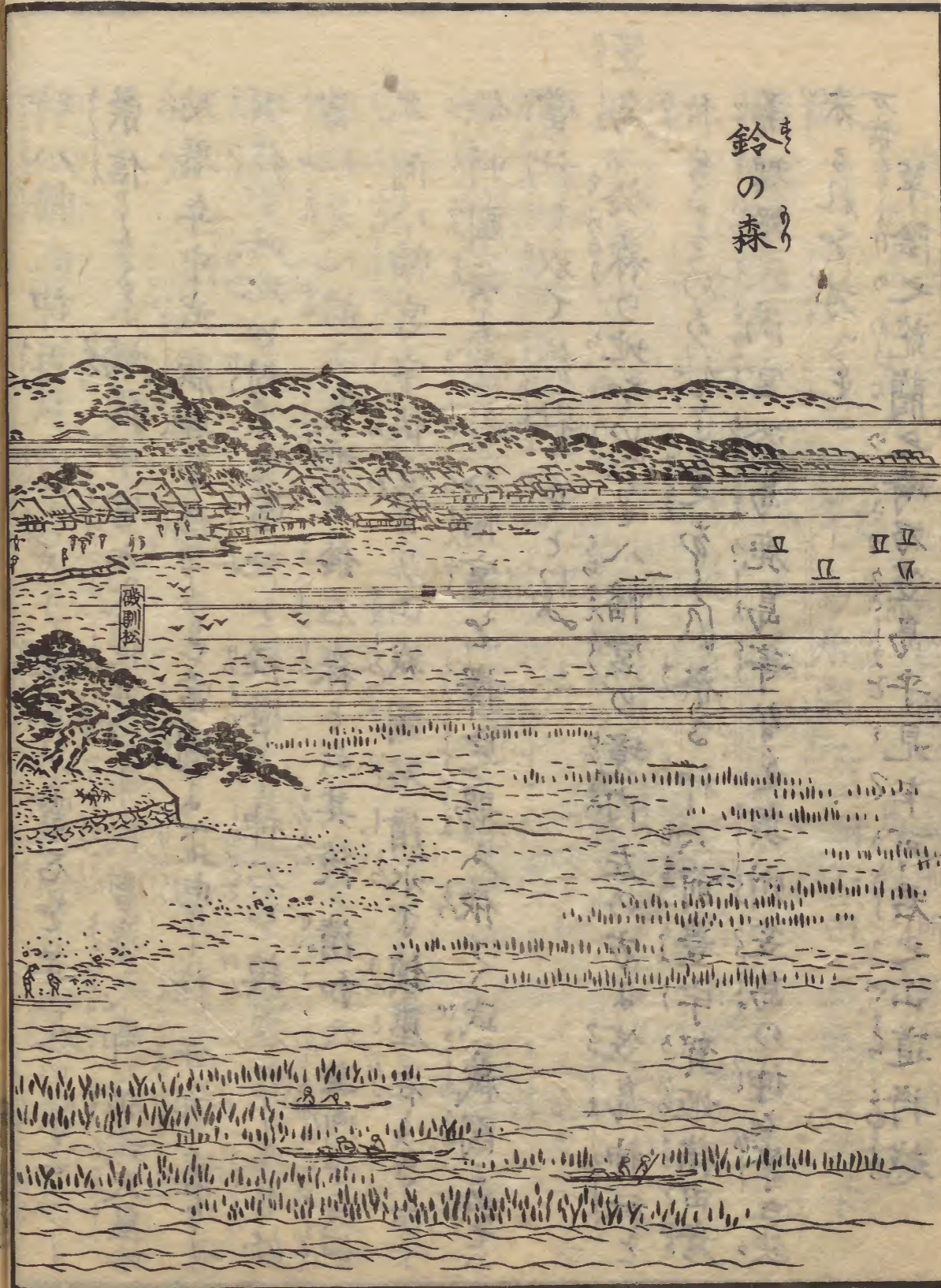
兼理姫天満宮淡島鹿島等なりと奥州笠島の神ト等き歟

未之れを考へて

草陰之荒蘭之崎乃笠島乎見乍可君之山道將越



鈴
の
森



秋の松花わりの松の葉をまきとすりし月八のまけり
為家

磯馴松 鈴の森の社前海道より左の方海濱人家の前よりあり

當社の神志と称せ

荒蘭崎 同く鈴森の邊とも或ハ云木原山ハ景坂とも藻汐草に

荒蘭磯とあり 北条家の所領後帳に梶原日向守六郷内新井宿を領

此地も古の 海道なり 此とありて荒蘭を新井は作る今も此文字を用ゆ

續後撰 白波のあゐの松花磯馴松をぬきのくそつれぬ 家長

夫木 沖津浪あゐの松花磯馴松をぬきのくそつれぬ 今出川院 近衛

あゐのくそつれぬ

四國雜記

芦をまきとすりし月八のまけり

道真 准后

十五百番

沖津浪あゐの松花磯馴松をぬきのくそつれぬ

沖津浪あゐの松花磯馴松をぬきのくそつれぬ 信實

笠懸松 ハ景坂よりあり 往古ハ幡太郎義家朝臣奥州征伐の時

此松ハ笠懸と懸らるるると云傳ハ高さ六七丈ありて大と牛をかく

枝葉柳條の如く垂下るる地を離るる其間ハ四五尺ハ過と

尤比類なき古松あり一ハ荒磯松磯馴松とも呼ばれ或ハ震松とも

号く 枝葉共ハ動揺せしむ此地より望めハ海上眼下よりありて美

景の地なり 土俗ハ景を誤りて

八幡山行慶寺 大崎より東海寺裏の方戸越村よりあり 文禄元年起

立浄土宗の 岡山念譽上人戸越八幡兼帶なる願成院と号し

梶原氏付室

戸越八幡 戸越村鎮守なり 天文年間鎮座ありと云御正幹を

聖徳太子の作本地佛阿弥陀如来の像ハ春日の作なり 當社



やまの
八景坂
鎧掛松



戸越八幡
行慶寺

境内のこいし小石をちやう疮瘡の守とてれいけん靈験ありとて土人とじん是を拾ひ取りく
 歸かへりる九月廿八日相撲あり 分限帳太田新六郎所領の中
 木原山 同後の丘山とつり木原氏の領地なり 祖先を伊豫の何野の一族とつり
 木原氏の系圖をくわん觀せ云く木原氏姓ハ德積祖先をかみ鈴木掃部介言行とのの
 四代の後同苗平兵衛吉親 御當家ト仕へま遠州山名郡木原の五貫文の
 地を賜たまはる其子を七郎兵衛吉次と号なし其米邑木原ト住すみ普請方を勤む
 然しかは天正三年二月十八日 台命ああり 在名とつりく鈴木氏を改め木原と号なす
 同十八年は武州に移原郡 此山頂ハ上古の相模街道をく
 荒藪宿といひ地なりとて古奇なありの跡を見ゆとてつて
 又池の中島ト辨財天の叢祠なりとあり 此宮を土民小野村の宮なりとつり其地
 醫福山桃雲寺 同所山際あり徳門ハ東向中へ海ト相對す
 眺望八景坂非同一 此寺龍崖下の耕田昔ハ海へく此崖下迄浪を打寄
 當寺ハ曹洞派の禪林なり中古此地の領主木原氏の祖なり 木原十郎吉次

慶長十五年庚戌 桃雲淨見居士中興せし境内は墳墓あり

極月十一日卒 碑銘ハ林羅山先生撰 蓮沼村あり

福田蓮花寺 蓮沼村あり 此地ハ六郷に属す永禄二年の頃蓮田真言

宗の古刹中々荏原郡の地頭荏原兵部有治と云一人出家と

蓮沼坊と號し當寺を創立す本寺十一面觀世音菩薩の

像ハ行基大士の作なり往古ハ巍々たり巨藍ありしが地頭

行方彈正忠日蓮の弘法を崇信し他宗の寺院を滅却す

行方彈正の宅地ハ六郷 其頃當寺も焼亡す堂塔悉く灰燼とかり

八幡塚の辺にあり同奉次と云ふ 此争亂の時ハ當寺

しとつと今ハ徒ハ其形をかりて存せり 此争亂の時ハ當寺

遷せしとかり今本門寺に 存せしもの是なり

按東鑑兼久三年六月十四日宇治川戰死の人の中荏原弥三郎同六郎

六郎又嘉禎四年二月十七日將軍入浴供奉の人の中荏原七郎三郎

貞政と云名を註せり同奉次の中延八幡宮の条下中荏原左衛門尉義宗

其子有成なりとつと人の名あり何れも此地より出づる人なり同ハ氏族の

華なり

女塚 女塚村農氏太左衛門の地あり相傳往昔竹澤右京亮新田

義與を害せん為都より宮方の御所の少將殿と申上臈の女房

年十六七計なる美女を呼下し義與に奪ふ又其後九月十三夜

義與を己の宅に迎へんと謀し小彼女凶兆ありとて是をどしむ

因り竹澤其事比なると怒り良等も余一件の女を此所迄

透し出し殺害せんと故に土民あをれんと亡骸を隠し一堆の塚を

築りてとせられとも其名の志とせりとて女塚との唱へ来は

と

長榮山本門寺 大國院と号し池上邑あり日蓮大士弘法の

一本寺中々三頭と稱せり一員あり 甲州身延山總州正中山

當寺日蓮大士終焉の古跡ゆゑ弘安年間の開創なり 佛の出世

小湊なり得道ハ灌燈あり法藏ハ身延かり入涅槃ハ池上なり云々 具宗祖

寺門本



大士を以て開山祖とす 文保元年丁巳六老僧弟二位日朗上人

當寺を修造して大刹とす 於て諸門徒推て開基と稱す

日朗上人ハ筑後公正法院大國阿闍梨と云姓八源父ハ新羅三郎義光の子南總

平賀の住人次郎盛義四世の孫平賀有國の子なり十歳中出家文永八年大士

後平賀の土軍の輩なり同九年北條時宗の命を受時印と封 諸宗の徒と法義を論じ

二年北條時宗の命を受時印と封 諸宗の徒と法義を論じ 昔ハ下駄草履

正月廿日池上ノ寂世壽七十八 花圓漫録云云 今池上本門寺也かくの

禪宗の古風 京都ゆく皆ありと云 古の人の物語なり

祖師堂 愍鹿子室永七年寅十月十三日炎上と云云 正徳三年渡辺幸庵老人對話

右馬頭頭李一揆を起すの時此本門寺諸堂 日蓮大士像 弘安五年十月十三日

田録及及びりし 日朗上人再建す 又和漢三才圖會に當寺

宗祖大士の木像ハ大士存存の日朗上人其側ありと云 題を作す云云

額 祖師堂 太虚庵 光悦筆 釋 王殿 伏見親王真跡 轉輪藏

像ハ共運慶の作なりと云 額 釋 王殿 伏見親王真跡 轉輪藏

祖師堂の後より 鐘樓 同題目堂の 題目堂 同題目堂の左より 常法華

鬼子母神 妙見堂 樓門 石階の上より 下の左右に金剛蜜迹の二像を置

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

行基菩薩の作なりと云 古川東師より述す

身延記行
万治二年
深草隱士
元政法師
やうにいふは是
とて池上へ
初てらへて修
志のうらまは
あてて書院
あまのふか
ぬねねふん
きよてあま
みまねね
きよてあま
きよてあま
人世以智音追師斯再尋
今宵池上月依舊照天心
手ねとくぬき違ふ
序者堂とてむ
肉けりのあまの
つねとりのあまの
あつんふあま
あまのあまの
あまのあまの
あまのあまの





法蓮寺



中延八幡宮



有成次男徳次郎徳次郎と号し徳次郎九老僧の一員九老僧の一員にして越中阿闍梨と号し越中阿闍梨正中原年甲子二月二十九日正中原年甲子二月二十九日

寺寶頼義朝臣議状義家朝臣八幡宮の神像を八幡宮の神像を荏原左衛門尉荏原左衛門尉

讓狀一通是も同一神像を越中阿闍梨

慈眼山萬福寺馬込村あり曹洞派の禪林なり相州の徳翁

寺屬本尊自然銅弥勒觀音勢至一光三尊なり中堂長二尺余左

牌并墳墓あり右一尺七寸あり

按靈牌の表萬福寺前三州大守香山不捨大居士正治二年正月二十日なり

是疑なり後世造り所あり鎌倉時世法益あり大居士と云

三河守と云あり又三河守馬込の地を領せり北条家の幕下の士は

寺寶布袋鞍梶原氏所持の角角あり前輪布袋和尚杖を携あり

燈今世より至く鎌倉時世の物と云なり

陣貝右大頼朝御富士の裾野あり

梶原氏肖像面長二尺五寸あり烏帽子を藏あり大紋の着あり

證文一通右大頼朝御建久七年此地に放鷹あり時當寺

馬込八幡宮同所より三河守馬込の方池上道あり

梶原氏宅地同所通るを隔て向あり今農民の園中に入る土俗

景時の館と是も三河守馬込の助五郎等の宅地なり

鳳来寺峯の薬師峯村あり峯照山正善寺の持あり鳳来寺

峯の薬師をうりせりと云

大金山光明寺宝幢院と号し新田明神あり五丁北北方

鶉木村あり西山派の浄刹なり上古の真言宗寛喜年間の草創

仁治の間四箇年當寺に住せり當寺ハ關東浄教勸寺の権興念佛弘通

是より後鎮西に統相續せむ當寺ハ關東浄教勸寺の権興念佛弘通

良忠の鎌倉光時寺

延暦

延暦

延暦

延暦



最初の道場

本堂本尊阿弥陀如来 立像三尺 山城國八幡村に住する康尚と

ひの人の作なり 康尚ハ美濃守康信とひの人の一子なりて八幡大菩薩の亦現あり

額 大宝王 弘法大師真跡なり

本尊縁起云 開山上人五十三歳 此年六月九日鎌倉鶴岡八幡宮へ

一七日の間参籠あり然る同十五日の夜社檀僧形の弥陀如来出

現しあひ上人へ十念を相兼しあひぬ上人歡喜ありて翌朝下向の

時社外に至られ異僧傍よりありて上人は弥陀の像を附与

あり依て武州鶴木村へ遷し系を 光明寺と号けり云

額 光明寶林 縁山大僧正満空筆

功德水 同本堂の前左の方の井の邊に八幡鎮座の靈地あり必名水あり當寺の鎮守

荒塚 本堂の前左の方あり相傳江ノ遠江守雷火は撃れて死せを塚に築き

觀音堂

同境内堂の右あり縁起云 善惠上人津國四天王寺の聖靈院あり

善惠上人宇都宮實信坊は餘りて此本堂を當寺とす乃寺外より此草

堂を構營し是を安置せ北朝の延文四年新田左兵衛義興竹澤右京亮あり

遠江守の謀計は降入り矢口の渡の舟中舟一族を悉く撃殺を殊は矢口の渡ハ奮怒

の跡なると雷火墮るる慶中寺院民屋も悉く焼とせし浄心とて此門此災

異を免んるを此本堂を祈念し雷火の難を道々の奇跡を蒙り其項を像の

故に土俗雷留觀音と稱す

當麻曼荼羅

本堂の後の壁に糊を西山上人傳は數數の曼荼羅を圖繪し

寺に有る第二とせと西譽上人曼荼羅此曼荼羅の圖中上品下生の蓮華青

蓮華となり三草計聖なるあり人々奇異の思ひを道に諱ひ來り是を拜せ

不淨の女人彼蓮華を手を歴れは其華萎枯り今も残り中品下生の

蓮華の損る形ありと記す

善導大師影像 昔善導大師自木像二軀を作し海に投して云く有縁の地は

置を今猶存せり 湖頭ハ此地に漂流せしハ當寺に遷し此と云

扇一柄

善惠上人より宇都宮實信坊より与へられ扇なり天福元年善惠上人歳五十

三春三月都を去り東國に赴きたまふ其時業内のより實信坊を伴ひて

下るふ然し上人實信ののりハ奥州に至るハ白川の淵を渡りて

魁の心を詠一首の和哥を持しハ所の扇は書附あり實信坊はわさひと光基不



光明寺



此詠解しわごとく云々のまはせしむるよりひさすありてをわらう記

開山善慧上人初解脫諱ハ證空俗姓ハ源氏天曆聖主の皇胤

加州刺史親季の子なり證空と云ハ父親季の法名證玄と治承元年丁

酉十一月九日誕生久我内大臣通親公養て子とて幼齡より菩提

心に住し故に吉水上人源空の許に投て十四歳薙髮して善恵と

号を性俊逸申て一を聞て千悟に建久九年の春月輪殿下の請よ

よ月源空上人選擇集を著し一時も善恵と偕し文義を考定

せ或時殿下云く師の滅後此書不審あは誰よりて是を決

せん師云く淨土の奥旨又此書の要義悉く善恵に附屬に我よ異

なりすとこそよおはく殿下善恵を崇信しあはり甚厚し上人都

鄙共よ伽藍を建立しあはり一十二區又淨土の曼陀羅を圖し

所よ収め佛經の印板を閑き未來の學者よ益あはりしむ後に

寶治元年丁未十一月廿六日白川遺迎院に於て化寂を歳七十一

西山善峯寺に居し盛に宗教を弘通あり故に世に西山上人

と稱し浄宗西山派の大祖と稱せ當寺往古ハ大伽藍中て關東の高野山と稱し衆人先亡葬に逆

修等の石塔婆を建參詣の人も多かりし故に今も古き

石碑石佛の類ハ此所彼所ハ存在せり寺の大門あり六七丁東の方より護摩堂屋敷と号する地あり

光明寺池 光明寺の南に添み往古の矢口江川筋ありしと云り今ハ

水流替るる南の方へ寄て流る池の長は東西貳百餘間幅ハ南北へ

五十間ありしと云り里老傳云記主禪師當寺に任職たりし時

元の西へ放ち多し其縁ありし今も池の鯉魚を取揚頭よ朱をりて名号を書て

佛會執行の時ハ彼魚ありし水よ上よ浮れり此池の鯉魚を取揚頭よ朱をりて名号を書て

新田大明神社 光明寺より五丁南の方矢口邑よあり別當ハ古義の

真言宗小しと真福寺と号し高畑宝幢院よ屬を祭す所の神ハ

新田左兵衛佐義興朝臣の靈あり十日を縁日とて拜殿のを經營せ



新田明神社
真福寺



修後お法にふり要に體ふ細き花三應寺東
貴可令侍達経にちし洋き

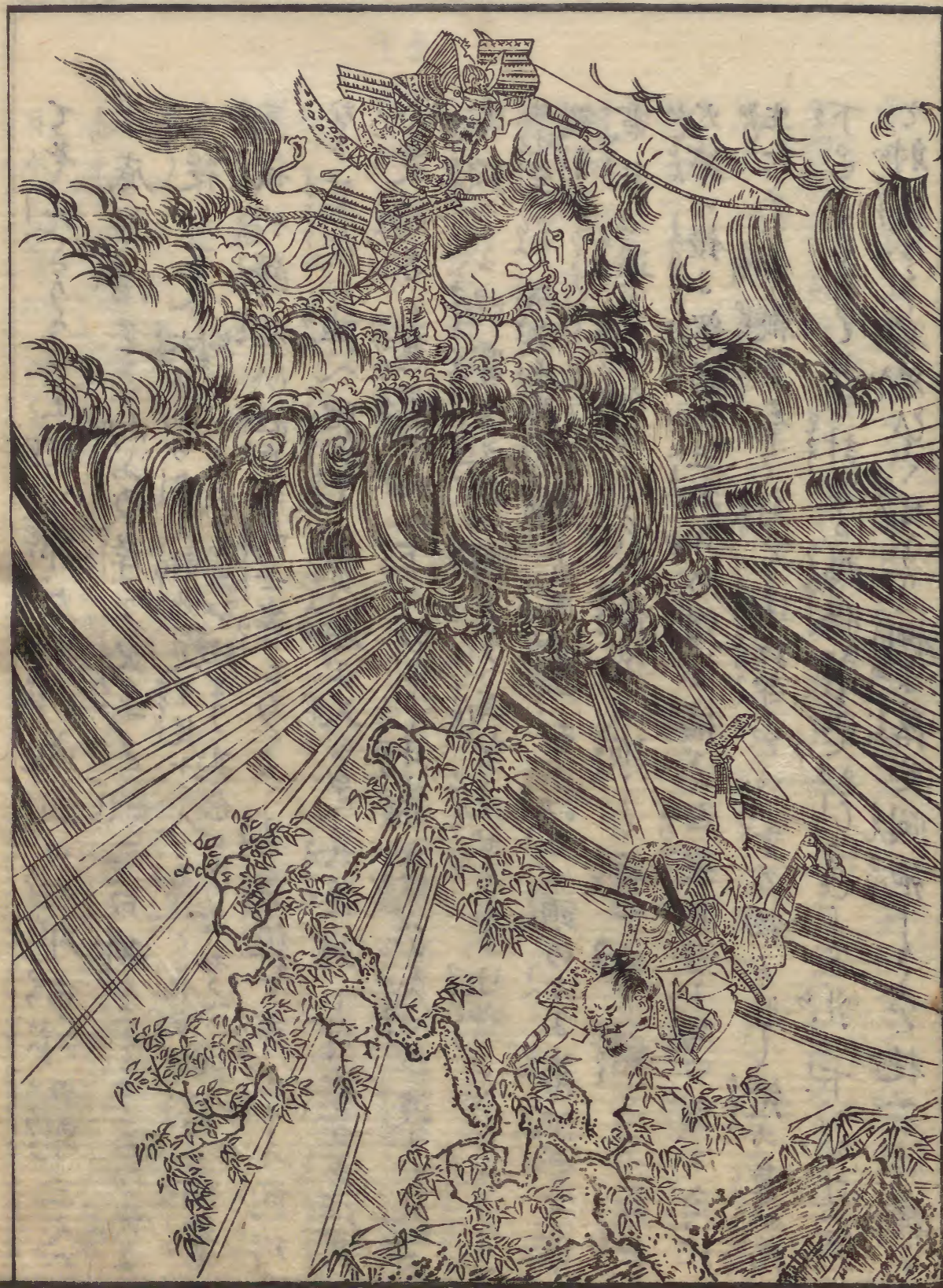
十月十一日

波多能末ふん

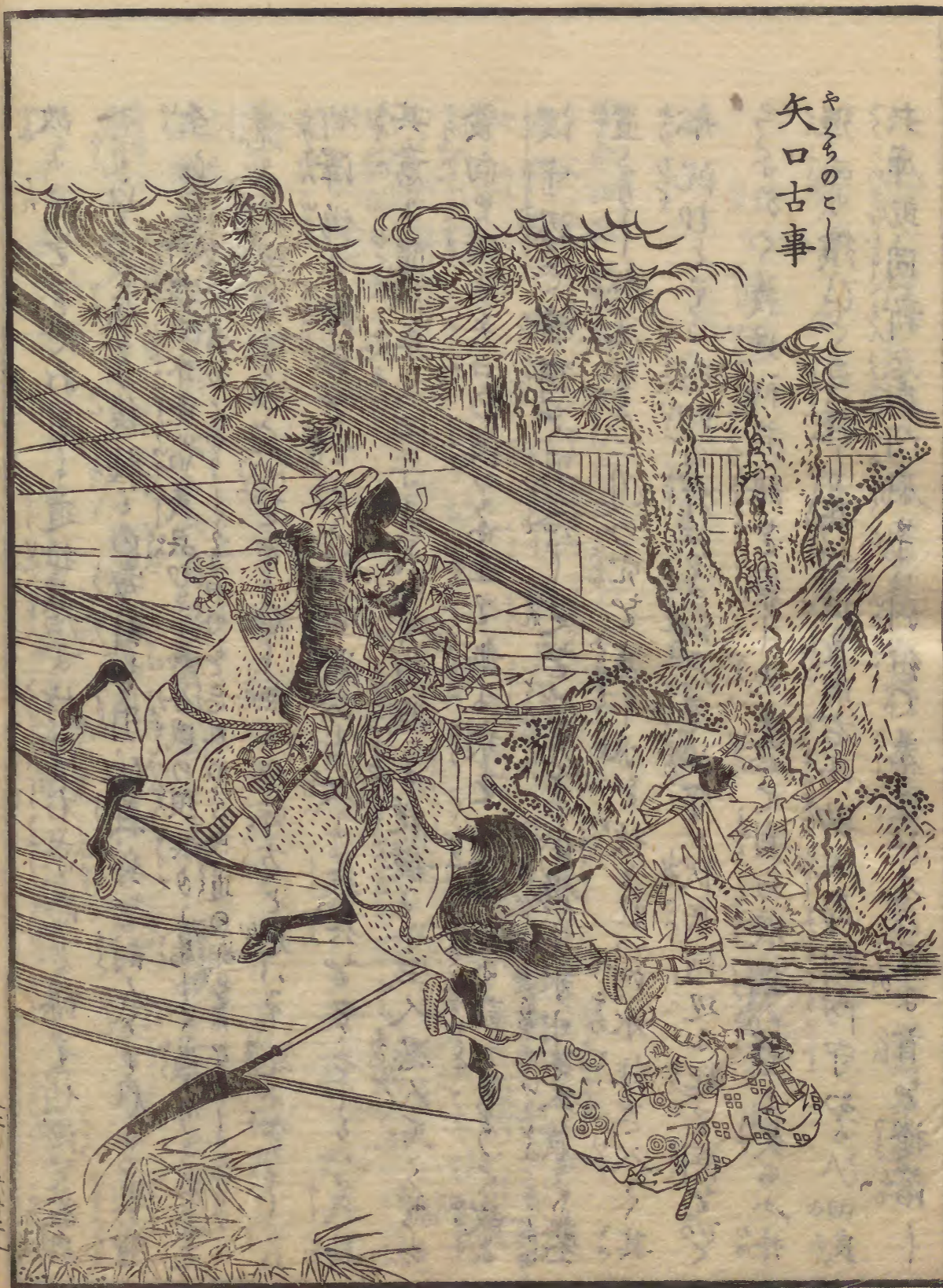
義興判

其余兵器古陶器の類ひ寺宝にせりて是を略せ
太平記云 **新田左兵衛佐義興**ハ 義貞の妾服の子也上野國小居より
家志あるむ一上野の兵也此義興と大将は取立三万騎共は鎌倉を責落し
吉野へ移りしもこれハ先帝威感ありし義貞の家と興せりしを其子と
名を徳壽丸と申せしを元服せし新田左兵衛佐義興と召れり是量人ハ勝也
智謀衆は秀々れハ公平七年むさ野合戦ありし鎌倉の軍也大敵を破り万卒ハ
當り古今 父左中将戦死の後ハ越後國はありし武藏下野の國
獨歩あり 中ゆく新田家は志を寄る輩竊は音信を通しりてハ兩國の間は
其勢漸く萌せり然し此は鎌倉へ聞えりてハ管領足利左馬頭基氏
畠山大夫入道道誓大に驚き義興ハ所在を尋ぐ度く勢を向ると
之も義興事ともせしりて打破り千變万化まてく人の態ふわん

故に是をそくあまし道誓潜し竹澤右京亮と謀り竹澤を義興
小下りめ夫あり後種々の毒計を用ひ義興を討んとせりとも未時
至らも 竹澤右京亮ハ曰義興むす野合戦の頃其は屬し忠ありきれとも
後鎌倉方とかりし曰好を忘れり無道の翔をハかせしあり
竟に美女をその心せりて無二の味方と思はる迄ありしハ
竹澤偽り鎌倉を亡さん謀を運り大に義興をせりしハ義興
其意を隨ひ延文三年十月十日の曉主使僅に十三人忍んてそぞろ
發向を既し矢口の渡りし至り船に乗せ竹澤先小謀をまらりて故に
渡守謬て櫓楫を取落し是を採んとし偽り水中ハ入兼る鑿
置りり一船底なる二川の穴を塞し水を抜れハ河水注き入る其
船沈むとせり時向の岸なる江戸遠江守ハ伏兵河辺に起り因をひく
る小於く義興初其謀を察し大に忿て自ら腹搔切ても失ふ井
彈也も續ひく自殺し其余世良田右馬助大島周防守あり由良
兵庫助同新左衛門尉等ハ引組て差違ひ又ハ互に首を搔落し



ヤムラノ
コト
矢口古事



て死する。土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人ハ
水底を潜り向ふの岸より上り敵三百騎よりあり終ニ
主後十三人 太平記の書に討死の人数主後十三人とあれと義典を共討死せし
始と九人の名を注せり其餘四人の名あらず 共ニ討死せ
其後竹澤及ひ江戸の両士等とりて其首級を尋出し入間河
なる基氏の陣へ馳参り實驗を入し其後同十月廿三日遠江守ハ
今度賜り恩賞の地へ下らむと日暮よ及ひ矢口の渡より雷
雷頻り鳴震きこれハ懼き馬を走せしある辻堂に入らんとす
觀音堂と云ハ鶴木光明寺 折々黒雲一むろ江戸頭の上より落下りて雷
電耳の邊に鳴閃めこれハ餘り怖く後を吃と顧み義典
火絨の鎧は龍頭の五枚甲の緒を縮く白栗毛なる馬の額より角は
生たふ乘鞭を打ち遠江守を弓手の物より燈の鼻に落
下りて七寸計なる馬俣をくわひ乳の下へかけぬ
と射通しと思ひく馬より倒れ落ちて悶絶しを從者共與

乗せく家より歸り七日の間水は溺る真似を死する
又翌の夜畠山入道の夢に新田義典長二丈と鬼あり牛頭
馬頭阿防羅利共十餘人を前後に随へ火車を引く左馬頭の
陣中へ入ると其日雷火は入間河の在家三百餘軒
堂舎佛閣數十箇所一時は灰燼となり是のち矢口の
渡に夜に光物あり往来の人を悩ませ種々の祟ありこれハ土肥
怖れあひて義典の靈を祀り新田大明神と崇ると云 以上太平記
の要を摘む
十騎社同所道を隔て向ふあり新田左兵衛佐義典の家臣十人の
靈を祀る此所も拜殿のち本社ハ一堆の荒塚のみあり土民
登与瀨明神と稱し 事蹟ハ先
詳なり
十騎との所謂 井彈正忠 大島周防守 南瀬口六郎
由良兵庫助 同新左衛門 世良田右馬助 市川五郎
土肥三郎左衛門以上八人の名太平記にあり其餘の人名今
然る異本に松田市河道孫七塚壺政權守進藤孫六左衛門等の名あり
日本武尊祠 傍よりあり 攝社と相傳ふ此所神を鎮座す





大森村の
 名産
 驚く家元
 多し五彩
 多し種々
 の器物と
 製す他
 邦の人求
 り得く
 家土産
 せり





大森和中散



梅の花の嵐雪



梅干見知張

浦田里梅園
行方彈正宅跡



此地の民家ハ前庭後園共ニ悉ク梅樹を栽て五月の頃其實を採り都下ニ鬻ぐされハ二月の花盛中ニ幽香を採り遊人必ク之ヲ

行方彈正忠明連宅地 六郷八幡塚の辺と云ふ人此地ニ御園村と

性光山圓頓寺 蒲田村ニあり日蓮宗池上本門寺ニ属す本寺ハ

釋迦多寶等の木像を安置し関山ハ九老僧日證上人 池上大坊の

中興ハ日藝上人なり 寛永二十年癸未二月朔日當寺ハ小田原北条家の臣六郷の

領主 小田原北条家の分限帳ニ行方与次郎六郷大師河原葛西寺嶋等の地を

行方彈正忠直清々宅地の跡あり當寺 関創の檀那あり

當寺過去帳ニ直清の法号を性光院殿圓安行頓日方大居士と

稱す 父ハ修理亮康親と云天正十八年庚寅三月 其墓碑ハ堂前左の方小

存せり寺前ニ存する所の溝堀ハ當時直清此地ニあり一頃の構の

外堀を其儘ニ用ゐると云小田原記ニ永祿九年武田信玄小田原ハ

人數少き隙を窺ひ思ひあはさる方より小田原へ押寄るとある奈

下ニ六郷ニ行方彈正居たり一間己らきこの辺所なる八幡を要

害ニ構へ稲毛の田島 横田 駒林 定朝等と引卒ト橋を焼落ト甲州勢を通すを信玄ハ品川の宇多河石見寺

鈴本等を追散ト六郷の橋落れハ池上へかき池上寺を追捕ト池上寺ハ本門寺

平間ト一所へ渡り稲毛の十六郷を追捕せしむ

蒲田八幡宮 同所道の傍ニあり前ニ記せし小田原記の文ニ行方

彈正其宅の辺なる八幡を要害ニ構ふとあるハ當社のよりある一

被ニ三代實録ニ貞觀六年八月十四日戊辰詔して武藏國

行方山妙安寺 海道の内新宿ニあり日蓮宗中々本門寺ニ属す

本尊ハ三寶として関山ハ日現聖人なる行方氏室圓光院妙安日行



大塚の菩提所と云 天正十七年丑 十月晦日あり

朗羽山長照寺 獵師町あり日蓮宗なり當寺は豊太閤秀吉公比

守佛なりと稱し北辰奴見大菩薩を安んず

六郷八幡宮 六郷の惣鎮守なり八幡塚村あり別當八真言宗小

安房國より大軍を卒し鎌倉へ入る項此所を旗を建軍勢の

著到を記しあひ日跡ありと之を勝利の後鎌倉鶴岡八幡宮を

勸請しあふとと祭禮ハ六月十五日中て神輿羽田より大師河原へ

移りたるま當社は頼朝卿建立の時梶原奉行せり記せし

梁牌ありと之を 梶原八景時なる馬込村万福寺の条下は奉る所の小

八幡塚 本社あり右の方の樹木繁茂せり 旗立杉 社地あり

古家敷 大門のくさの畑とあり古の海道と稱せり又竹林あり昔頼朝卿

旗竹は用ひられしものか繁茂せしと云り

六郷渡 八幡塚の南あり此川ハ多摩川の下流中て八幡塚あり

河崎の驛への渡しなり昔ハ橋を架せり享保年間田中立隅と

りる人の工夫あり洪水の災を除んる橋を止め舟渡せしと云り

田中立隅ハ俗稱休愚右衛門嘉古と稱し冠帯老人と号し水理は達を相州酒白川

水と治めし此人の工夫なり其河原は其事を記せし碑あり又民間有要と云り

書を著し今上平間村の田中山妙光寺と 東海道名所記ハ此橋の長と百二

十間とあり 東路の四大橋といふ江州瀬田参州狹路同吉田及ハ此六郷の橋を由

癸未記行 六郷橋 忠者武州甲族而屢往來鎌倉則不可無其理故首

注云俗説 六郷橋 忠者武州甲族而屢往來鎌倉則不可無其理故首

忠者武州甲族而屢往來鎌倉則不可無其理故首

河崎及此云六郷里俗稱重忠居此村重忠武州七黨

長攻野戰報君恩攀龍附鳳勇功士頻繁闔國列侯

躐同處去江城五里許出者朝投化者万歲高

會可尊馬劍矛僕從異域來名走與利奔可笑

尾生汗士農工商幾過胡絲玄霜鴻盡朝裴氏丁

早吟成女何菊花後自斯出顧視江城殆消魂

府今歡作不可言及江城望衡門三月遠征幸歸



六郷渡場



羽田
辨財天社



此地の眺望最秀美
 東海漫遊
 旭日の房総の
 山掛あり南に
 玉川混とて清
 流の富峰の雪不
 映もわり西の海老
 取川を隔て東海
 の驛路あり往
 來得ずより北に
 筑波山岨とて
 飛雨行雲の氣象
 万千なり
 此嶋より相州三浦
 浦賀へ八里當り
 海路九八里南徳木
 更津の湊へ八里當
 る海路八九里南此
 総の界八里當りて
 海路十三里北を隔て
 見 富峯八里のたふ



要 鳩辨財天社 羽田村の南の洲崎はあま 故よ羽田辨財天と称せり
此羽田の浦を扇と稱し 羽田の浦は扇と稱し 羽田の浦は扇と稱し 羽田の浦は扇と稱し
辨財天女の像ハ相州江島本宮巖窟辨財天と同躰なり 弘法大師の
作なりとの説ハ此靈像昔江戸有馬侯藤原純政の家ハ傳へて尊
信ありし 當社海卷法印の時 靈夢ニ感す 所ありて以て宝永八年
辛卯四月此本宮と此地ハ遷しなるとなり
三山大竜寺 開山 香國 禪師 正徳
三年ハ謫き所の社記と有馬家の

要

綴起異同 又當社ハ如意寶珠一顆を安置せり 天然の物なり其質
相傳ふ 武州日原山ハ弘法大師開創の地なり 山中ハ大日
靈水と称するあり 水中一顆の宝珠を存せ然し 往古此宝珠玉
川の流るるをひ 羽田の辺に止る水中 昼夜靈光を現は 依土人
りて 綱を下し 是を得る 後社を建て 崇敬を當社是なりと
云云 畧 塚起 康治二年の春 當社の南の大河に 綱引して 一顆の
宝珠をぬき 故に 玉川と名つけ 玉川并才天女と稱し 又此地 往古より
社殿を經營するとも 屢風波の災に 罹り 永く保り あり
ハ 別當海卷阿闍梨法華經 全部の文字を一字一石ハ
書寫し 此海底に 沈めて 島を築き 宝殿を 建立せり 其の感應 如
あつらん 夫より 己降 青松鬱蒼と 繁茂し 庭上 苔むり 竟ハ
風波の難を 免するを得 たり たり

江戸名所圖會天璇之卷

天保三年



Faint handwritten text in Japanese, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and the texture of the paper.

